

#### 4. 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業「生活・自立支援キャンプ」

##### (1) 児童養護施設やグループホームで暮らす子供たちのための事業

### わくわくチャレンジキャンプ（佐賀）

令和3年8月10日（火）～12日（木）

【担当：松元 延行】



#### 1) 事業の背景

子供の貧困率は年々上昇しており、国際的に見ても大変深刻な状態にあります。国を挙げた対策が急がれる中、平成25年6月に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立し、平成26年8月には「子供の貧困対策に関する大綱」（平成26年8月29日閣議決定）が取りまとめられ、国において総合的な取組が行われることとなりました。

このような国の動向を踏まえ、機構においては、平成26年度から、児童養護施設、母子生活支援施設及びひとり親家庭等の子供を対象に、経済的に困窮した家庭の子供の「生活・自立」を支援し、生活習慣の改善や自己肯定感の向上につながる多様な体験活動の場を提供することとし、本所でも子供の貧困対策事を実施してきました。

本所のキャンプは、児童養護施設と連携して施設の子供たちを対象に実施する「わくわくチャレンジキャンプ（佐賀）」と、母子寡婦福祉会と連携し、ひとり親家庭の子供を対象に実施する「わくわくチャレンジキャンプ（長崎）」の2事業を企画しています。

#### 2) 事業の趣旨

児童養護施設の子供たちが、自然体験を通じて基本的な生活習慣や自立する力を身につけるとともに、達成感や成功体験を積み重ねて自尊感情を高める一助とする。

日常では経験することの少ないテント泊体験や沢登り等の自然体験、共同宿泊生活体験を通じて、「早寝早起き朝ごはん」「家庭学習の習慣」といった基本的な生活習慣を身につけ、炊事、洗濯、後片付けなどの生活力の向上を図る。

#### 3) 目標

- ① 自然体験や生活体験の中で自身ができた活動や、自分ができることを見つけることができる。
- ② 自然の中で体を動かすことで体力の向上を図る。
- ③ 早寝早起き朝ごはんなど、規則正しい生活を送ることができる。

#### 4) 対象

社会福祉法人済昭園 児童・生徒及び職員

#### 5) 事業の実施

##### ① 期日

令和3年8月10日（火）～8月12日（木） 2泊3日

② 参加者

男女別・校種別内訳

	男	女	計
幼稚園児（年長）		2名	2名
小学生	9名	5名	14名
中学生	4名	4名	8名
高校生	7名	3名	10名
施設職員	4名	5名	9名
計	24名	19名	43名

③ 日程

1日目	2日目	3日目
送迎	6:30 起床	6:30 起床
10:00 開会式	7:00 朝食（野外炊事）	7:00 朝食（携帯食）
10:30 アイスブレイク	9:00 沢登り（コース選択）	8:00 清掃・片付け
12:00 昼食（弁当）	12:00 昼食（弁当）	9:00 アイロンがけ
13:00 テント設営	13:00 洗濯、勉強、リラックスタイム	10:00 全体の振り返り
16:00 夕食（野外炊事）	17:00 夕食（野外炊事）、入浴	11:30 昼食（レストラン）
20:00 入浴	20:00 花火	12:30 閉会式
20:30 一日の振り返り	一日の振り返り	13:00 出発
21:30 暗闇体験 （希望者のみ）	21:30 就寝	14:00 陶芸絵付け体験
22:00 就寝		16:00 解散式 解散

④ 活動の様子

**【テント設営】**

今回のキャンプは、当所のキャンプ村の中でテント班毎に自由に好きな場所にテントを設営して、2泊3日を過ごす予定でした。しかし、事業実施期間において、大変不安定な天候が続くことが予想されており、テント泊でキャンプを実施するか最後まで悩みました。

キャンプ当日、児童養護施設から当所への移動時間において、3日間の天気予報や実施可能な活動と天候によるプログラムの進行遅れの予想等を基に総合的に判断し、結果として別館きじ棟での宿泊に変更しました。

子供たちに、「宿泊棟内であれば好きな場所にテントを設営できる」と伝えましたが、全ての班が畳の大広間にテントを設営しました。子供たちは、この3日間を快適に過ごすことができるよう、力を合わせて各班のテントを張っていました。

**【暗闇体験】**

月や星の明かりがなければ、夜の森の中は漆黒の闇に包まれます。明かりのある生活が当たり前の今、暗闇を知らない子供も多くいます。今回、希望者限定で暗闇体験を行いました。林道の中、ペアを作り、引率者が迎えに来るまで静かにその場で待ちます。耳が慣れ木々や小動物の音が聞こえてきたり、夜目で少しずつ周りの景色が見えてきたりと、鋭敏になる自身の感覚を体感していました。

### 【沢登り】

今回のキャンプで子供たちも施設職員も一番楽しみにしていたのは、沢登りでした。どの年齢の参加者も楽しめるよう、低学年向けと高学年向けの難易度別2コースに分かれて沢登りを実施しました。子供たちは、夏でも冷たい水の中で、一生懸命ゴールを目指して岩を登りました。当所及び施設職員のスタッフは、子供たちが安全に活動できるよう、役割分担を行いサポートに徹しました。

また、ただ沢を登るだけではなく、水遊びを通して水の冷たさを感じたり、沢蟹を捕まえて川の生き物を観察したりと、多くの学びや発見ができるように随所で説明を挟み、時間をかけて沢登りを楽しみました。

### 【洗濯・アイロンがけ】

養護施設での生活や、今後一人暮らしをした際に色々な家事能力が身に付けられるように、このキャンプでは、自分が着た服を洗濯して部屋に干し、翌日にアイロンがけを行う活動を行いました。

子供たちは、宿泊室の2段ベッドの間に洗濯ロープを張り、自分の洗濯物（Tシャツとタオル）を干しました。

翌日は、アイロンがけを行いました。普段、タオルを畳む手伝いをしている子供は多く、手際よくタオルを畳んでいました。一方、アイロンがけは初めて行う子供が多く、きれいに服のしわが伸びる様子を見て感動していました。

### 【掃除】

当たり前のことではありますが、自分たちが使った活動場所の片付けも自分たちで行いました。宿泊体験の乏しい子供たちは、片付けを後回しにしがちです。「時間の貯金をしよう」を合言葉に取り組んできたキャンプだけに、掃除も協力して素早く行う事ができました。その結果、その後の自由時間が増え、ゆとりをもって最終日を終えることができました。

### 【陶芸絵付け体験】

児童養護施設の周辺自治体には、有田町や波佐見町など陶芸が盛んな地域があります。今回、そんな地域の特性を生かし、産業の一つである陶芸に関連した体験活動として、外部施設での陶芸絵付け体験を実施しました。

参加者は、陶器の素焼生地に、藍色絵の具（呉須）で予め考えてきた好きな絵や文字を、思い思いに描きました。

絵付け後の素焼き生地は、施釉～焼成（仕上げ）の工程を経て、絵付け体験から約2週間から1か月後に陶器として出来上がります。当所職員が、直接参加者へ手渡しする予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により県外移動の自粛等が要請されたため郵送しました。

## 6) 評価

### ① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
88%	12%	0%	0%

## ② 参加者の声

- ・職員の力を借りながらも、自分たちでなんとか協力することができた。
- ・できないと思っていたことでも、できた。大人になれた気がした。
- ・まだチャレンジできていなかったことは、次回チャレンジしてみたいと思いました。
- ・日頃生活している環境とはまったく違う環境で、子供たちがどういった考え方をするのか、どんな考え方をするのかを見ることができて、より子供たちのことを知ることができたキャンプになりました（養護施設職員から）。
- ・中学生や高校生は、日数を重ねるごとに自分たちでできることを率先して取り組んでくれており、頼もしさを感じた。これからの進路や生活などで生かしてくれると嬉しい（養護施設職員から）。

## 7) 成果と課題

### ① 成果

連携先の児童養護施設とは、2年前から事業を連携して実施する準備をしてきましたが、一昨年度（令和元年度）は事業当日の豪雨で延期（日帰り）へ、昨年度（令和2年度）は新型コロナウイルス感染症の感染拡大で中止を余儀なくされました。開催中止・延期が続いたため、子供たちや職員の期待も高まっており、どの活動も全力で楽しんでいました。今年度もコロナ禍で開催が危ぶまれ、様々な行事等が中止される中であっても子供たちに体験活動を提供できたことは、成果であると思います。

### ② 課題

児童養護施設とは事業の企画・立案時から連携していましたが、参加する施設職員全員とは打ち合わせができていたわけではなく、事業実施時に、養護施設職員間における意識に差が生じていました。忙しい中で準備を進めていても、事前に当日の参加スタッフ全員でのミーティングを設け、事業の共通認識と各スタッフの役割について、すり合わせておく必要があります。

### ③ 今後の展望

当キャンプは、生活・自立支援キャンプとして、本来参加者負担となる食費や保険代等を含む全ての事業費を自然の家が負担し実施します。

今回連携した児童養護施設とは、今年度を初年度としてあと2年間は生活・自立支援キャンプを連携して実施します。今年度の成果と課題を踏まえ、次年度以降の事業をより良くするための打ち合わせを重ねるとともに、3年後に連携施設が単独で子供ゆめ基金の助成申請を行えるように助成金申請書類の記載方法を教授する等の支援を行っていきたいと考えています。

また、青少年の貧困対策事業として、当機構が実施している「学生サポーター制度」を周知し、児童養護施設に在籍する進路選択に悩む高等学校3年生の情報を共有したり、児童養護施設が当所を利用する方法等を案内したりする等、児童養護施設の子供たちに対する体験活動の機会の提供拡大にも尽力したいと考えています。

## (2) ひとり親の家庭対象事業

### わくわくチャレンジキャンプ（長崎）

令和4年1月8日（土）～10日（月・祝）

【担当：松元 延行】



#### 1) 事業の背景

子供の貧困率は年々上昇しており、国際的に見ても大変深刻な状態にあります。国を挙げた対策が急がれる中、平成25年6月に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立し、平成26年8月には「子供の貧困対策に関する大綱」（平成26年8月29日閣議決定）が取りまとめられ、国において総合的な取組が行われることとなりました。

このような国の動向を踏まえ、機構においては、平成26年度から、児童養護施設、母子生活支援施設及びひとり親家庭等の子供を対象に、経済的に困窮した家庭の子供の「生活・自立」を支援し、生活習慣の改善や自己肯定感の向上につながる多様な体験活動の場を提供することとし、本所でも「生活・自立支援キャンプ」を実施してきました。

本所のキャンプは、児童養護施設と連携して施設の子供たちを対象に実施する「わくわくチャレンジキャンプ（佐賀）」と、母子寡婦福祉会と連携し、ひとり親家庭の子供を対象に実施する「わくわくチャレンジキャンプ（長崎）」の2事業を企画しています。

#### 2) 事業の趣旨

ひとり親家庭の子供たちが共同宿泊生活体験を通して、「早寝早起き朝ごはん」・「家庭学習の習慣」といった基本的な生活習慣や、家庭で生かせる献立作りや調理法・栄養バランス等の「食育」に関する知識・技能を身につけ、できる体験を積み重ねることで、自尊感情を高める一助とする。

#### 3) 目標

- ① 共同宿泊生活体験を通じて、「早寝早起き朝ごはん」・「家庭学習の習慣」といった基本的な生活習慣を身に付ける。
- ② 家庭で生かせる献立作りや調理法、栄養バランス等の食育を身に付ける。
- ③ できる体験を積み重ね自尊感情を高める。

#### 4) 対象

島原市・南島原市・雲仙市・諫早市・長崎市・長与町・時津町・大村市・東彼杵郡・佐世保市在住のひとり親家庭の小学生・中学生・高校生 40名程度  
※保護者・母子会役員の参加可

#### 5) 事業の実施

##### ① 期日

令和4年1月8日（土）～1月10日（月・祝） 2泊3日

② 参加者

男女別・校種別内訳

	男	女	計
小学生	9名	3名	12名
中学生	1名	名	1名
大人		2名	2名
計	10名	5名	15名

③ 日程

1日目	2日目	3日目
送迎	5:30 起床	6:30 起床
10:00 開会式	6:30 ご来光ハイキング	7:00 朝食 (レストラン)
10:30 買い物会議	8:00 朝食 (レストラン)	8:20 清掃・片付け
12:00 昼食 (弁当)	9:00 洗濯、勉強	9:00 アイロンがけ
13:00 買い物体験	10:30 カラフル筆ペン アート体験	家族への手紙
16:00 夕食 (野外炊事)	12:00 昼食 (レストラン)	11:30 昼食 (レストラン)
20:30 入浴、 一日の振り返り	13:00 リラックスタイム	12:30 全体の振り返り
21:00 就寝	15:00 お正月遊び選手権	13:00 閉会式 送迎
	17:00 夕食 (バイキング)	
	19:00 たき火のつどい、 星空観察	
	20:30 入浴、 一日の振り返り	
	21:30 就寝	

④ 活動の様子

**【買い物会議、買い物体験】**

ひとり親家庭の子供たちの自炊能力の向上を目的として、自らが食べる料理を考え、必要な食材を購入し、実際に調理して食べるところまでの一連の流れをプログラムとしました。

参加者は事業担当が提示した「1汁3菜」を作るお題に対し、自分の料理レパートリーを増やそうと、班で挑戦してみたい料理を考え、必要な食材や分量を書き出しました。午後からは実際にスーパーマーケットに行き、班の予算内に収まるように買い物を行いました。自然の家に戻ってからは、レシピを見ながら作りました。

予め指定された料理を作るのではなく、自分でレシピを考える活動であるため、班で意見をまとめる時間こそ苦労していましたが、作る料理が決まった後は主体的に行動し、積極的に調理をする姿が見られました。

**【ご来光ハイキング】**

1月上旬の事業であり、正月行事に関連する自然体験活動を取り入れたいと、白木峰高原でご来光を拝光する早朝ハイキングを行いました。出発時間の6時30分はまだ

暗く、足元や野生の猪に遭遇しないよう周りを警戒しながら、夜明け前までに目的地に着けるよう高原まで移動しました。精神的にも肉体的にも厳しく、何度も弱音を吐いていた子供も、高原での朝焼けの景色に感動していました。

#### 【洗濯、アイロンがけ】

今後のお手伝いの幅が広げられるように、このキャンプでは、自分が着た服を洗濯して部屋に干し、翌日にアイロンがけを行う活動を行いました。

子供たちは、宿泊室の2段ベッドの間に洗濯ロープを張り、自分の洗濯物（Tシャツとタオル）を干しました。

翌日は、アイロンがけを行いました。普段、タオルを畳む手伝いをしている子供は多く、手際よくタオルを畳んでいました。一方、アイロンがけは初めて行う子供が多く、きれいに服のしわが伸びる様子を見て感動していました。

#### 【お正月関連体験（お正月遊び選手権、他）】

年始の事業として、お正月に関する活動を多く実施しました。「お正月遊び選手権」と称して、羽子板、けん玉、諫早の文化・歴史を題材にした諫早かるたの3種目で、個人・チームの得点を競いました。

また、事業初日は同日程で、全国一斉書き初め大会が実施されており、「高校生の書道パフォーマンス実演」を見学させてもらいました。翌日には、「カラフル筆アート体験」、自然の家レストランの協力による「おせち料理実食体験」も行いました。参加者からは「コロナで今年はお正月らしいことができなかったのが楽しかった」といった声が聞かれました。

#### 【リラックスタイム（シiesta）】

早朝ハイキングを実施したことや、時間いっぱい活動を入れてしまうと、勉強時間に集中できなかつたり、活動中に疲労で思わぬけがにつながったりする恐れを考慮し、早朝から活動を行った2日目の昼食後、リラックスタイムとして、2時間のシiesta（お昼寝）を行いました。

大人の参加者は、1日目からの疲労を癒すことができ、「お昼寝なんて必要ない」と豪語していた子供たちも、しっかりとお昼寝をすることで、その後の活動に集中して取り組むことができました。事業を運営する側として、お昼寝を設定することに気が引けますが、事業全体を考えると、効果の高いプログラムとなりました。

#### 【掃除】

自分たちが使った部屋の片付けも自分たちで行いました。宿泊体験の乏しい子供たちは、片付けを後回しにしがちです。「時間の貯金をしよう」を合言葉に取り組んできたキャンプだけに、掃除も協力して素早く行う事ができました。その結果、その後の自由時間が増え、ゆとりをもって最終日を終えることができました。

#### 【勉強・家族への手紙】

家庭学習の習慣化を図るために、洗濯の時間と並行して勉強の時間を設け、冬休みに入る前に出された学校の宿題を持ち寄り、学習室で勉強を行いました。

また、3日目のアイロンがけの時間には、並行して家族宛に手紙を書く時間を設定しました。親子で参加している参加者も、このキャンプの思い出やできるようになったこと、日頃、口に出して言えない感謝の気持ち等を、手紙に記していました。

## 6) 評価

### ① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

### ② 参加者の声

- ・これからは家でも自分から何でもチャレンジして、できるようにがんばりたい。
- ・初めての人でも、特徴をつかんだり、名前を覚えたりすることで、仲良くなれて友達になれた。
- ・これからはがんばりたいことは、自分からお手伝いをすることです。
- ・自然の中に過ごすことの大変さや良さが少しだけどわかった気がする。自分のことも見つめ直す良いきっかけになりました（参加保護者から）。

## 7) 成果と課題

### ① 成果

当事業は、毎年継続して実施しており、この事業における交友関係もできています。初めて参加した子供及び保護者も、ひとり親家庭という共通環境の参加者の中で、気兼ねなく打ち解けあっていました。

また、コロナ禍においても、これまで参加してきた子供たちが、参加者同士やスタッフと再会を果たして一緒に活動することで、コロナ禍における参加者のストレス軽減につながっていました。

活動においては、精神的にも肉体的にも厳しかった冬季の早朝ハイキング中に、何度も弱音を吐いていた子供も、高原での朝焼けの景色に感動し、事業中の様々な活動同様、達成感を味わっていました。

事業の計画を進める中で、同日程で行われた「全国一斉書き初め大会」との連携を行い、高校生の書き初めパフォーマンス見学、カラフル筆ペンアート体験、おせち料理実食体験など、お正月に関連した文化体験なども取り入れる事ができました。

### ② 課題

今回、所外での活動（買い物会議～買い物体験）を取り入れましたが、スケジュールの関係で1日目に計画して実施しました。しかし、参加者にとっては、集団の雰囲気醸成されていないため、難しい活動となりました。

参加者が多数いた場合、大型バス借用費用が事業費を圧迫しないよう1日目に実施を計画しましたが、今後、プログラムを計画する際には、事業目的に適う活動とそのために必要な予算をよく試算する必要があります。

また、事業中の詳細な活動において、参加者の生活を踏まえる必要がある内容もありました。参加者の生活実態や、時代の変化を踏まえて、活動内容も微修正する必要があります（電子レンジを用いた時短調理の浸透、アイロンがけを行わない家庭の拡大）

### ③ 今後の展望

当キャンプは、生活・自立支援キャンプとして、本来、参加者負担となる食費や保険代等を含む全ての事業費を自然の家が負担するキャンプとして実施してきました。

複数年継続してみても、参加者は、当事業のみを継続して参加する傾向にあることが分かりました。その一因として、ひとり親家庭の経済状況が考えられます。

今後は、ひとり親家庭の子供であっても、自然の家が実施する他の教育事業へ参加で



きるような仕組みづくりを考えていきたいと思えます。

また、課題を抱える青少年の自立を支援する取組として、社会一体となって、支援の輪を広げられるように、母子寡婦福祉会を含め、各関係機関との連携を深めていきたいと考えています。

長崎県及び各市町母子寡婦福祉会には、事業成果の報告等を行い、事業趣旨を理解していただき、来年度の当事業に対する支援を継続してもらいたいと考えています。また、来年度は、隣県である佐賀県からも参加者を募るか検討しており、その際も、母子寡婦福祉会内の横のつながりを期待しています。

そして、母子寡婦福祉会を通して、各自治体の福祉課等とも連携の輪を広げ、今後も我が国の青少年を取り巻く貧困問題に対して、横断的に協力して一丸となって取り組むための一助としたいと考えています。

### (3) 不登校、引きこもり、ネット依存、ADHD 等発達障害や身体障害など課題を抱える青少年の支援事業

#### 不登校・引きこもり等の課題を抱える青少年の支援事業 「諫早自然の家にきてみんなね！」

通年（繁忙期（3月下旬～4月末、7月下旬～9月末を除く）

【担当：大嶋 和幸】



#### 1) 事業の背景

文部科学省の調査では、「不登校児童生徒」とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により登校しない、あるいはしたくてもできない状況（病気や経済的理由によるものを除く）にあり、年間30日以上欠席した者をいいます。

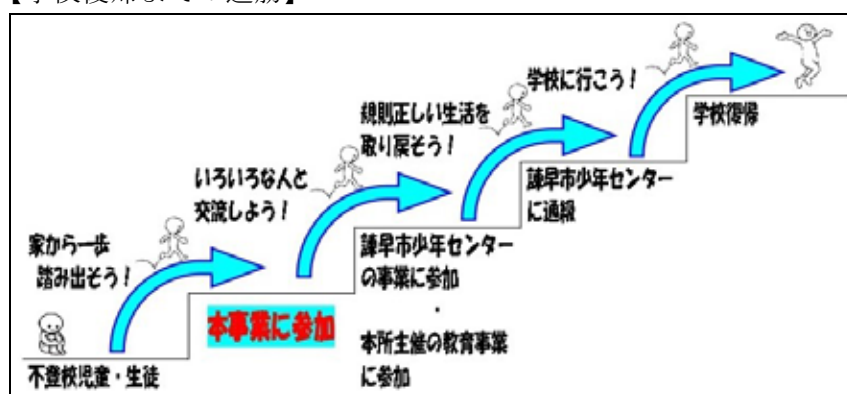
不登校、引きこもりについては、平成25年度以降継続して増加傾向にあり、喫緊の課題となっています。本所がある諫早市においても、全国平均は下回るものの、小学校で約50名（0.7%）、中学校で約120名（3.5%）の児童生徒が不登校の状態にあります。

諫早市では、不登校児童生徒の受け皿として「少年センター」内に適応指導教室を開設していますが、ここに通うことができていない児童生徒数は小学生が2名前後（4%）、中学生が18名（15%）と、低水準にとどまっています。

少年センターでは、諫早市内の不登校、別室登校児童生徒（同センター通級生を含む）を対象に、本所を利用した体験活動プログラムを実施しています。多くの通級生が本所での活動を楽しみにしており、通級生以外の児童生徒も参加しています。そのことから、不登校児童生徒の学校復帰への架け橋としての本所への期待は大きいものがあります。

そこで本所では、学校や適応指導教室へ通うことができない児童生徒やその保護者を対象に、本所での自然体験活動プログラム等を提供し、家の外で活動すること、他者と交流することの楽しさや達成感を感じさせることで、子供たちの自己肯定感、自己有用感、新しいことに挑戦する意欲を高め、学校や適応指導教室へ通学できるように支援することを目的とした新たな事業を開発することとしました。

#### 【学校復帰までの道筋】



#### 2) 事業の趣旨

自然の家での様々な体験活動を通して、不登校、引きこもりなどの課題を抱える青少年に自然体験活動の楽しさや達成感を感じさせ、自己肯定感や自己有用感を高める。また、他者との交流や自然の家での規則正しい生活を通して、基本的な生活習慣づくりのきっかけとする。

【事業の趣旨】



3) 目標

- ① 自然の家で様々な体験活動を楽しむことで、家の外での活動に対する意欲を持つことができる。
- ② できる体験を繰り返すことで、達成感を味わい、自己肯定感、自己有用感をもつことができる。
- ③ 本所職員やボランティア等との関わりを通して、他者と交流することの楽しさを感じることができる。

4) 対象

諫早市内の不登校、引きこもり等の課題を抱える児童生徒及びその保護者  
各回1家族または1グループ

5) 協力団体

- ① 諫早市教育委員会
- ② 諫早市小学校校長会、中学校校長会
- ③ 諫早市少年センター
- ④ 諫早市PTA連合会
- ⑤ 諫早市民生委員児童委員協議会連合会
- ⑥ 長崎県立こども医療福祉センター
- ⑦ 県央保健所

【協力団体相関図】



## 6) 事業の実施

### ① 参加者及び実施日

参加者（諫早市内中学校1年生女子及びその母親）

日付	内 容
11月8日（月）	自然物（どんぐり、松ぼっくり）を使ったクラフト活動
11月19日（金）	リースづくり
11月26日（金）	葉っぱのスタンプ（エコバックづくり）
12月4日（土）	焼き芋
12月13日（月）	ウォークラリー
12月24日（金）	クリスマス会（カードゲーム）
1月15日（土）	カードゲーム
1月22日（土）	火起こし体験（まい切式火起こし器、ファイアスターター）
2月27日（日）	カラフル筆ペンアート

### ② 活動の様子（※本人及び保護者の意向により、写真の掲載なし）

#### 11月8日（月） 【自然物（どんぐり、松ぼっくり）を使ったクラフト活動】

本所が事前に準備したどんぐりや松ぼっくりを使って、自由にクラフト活動を行いました。女性スタッフが1対1で対応していることもあり、安心した様子で活動していました。本人も保護者ももう一度参加したいとの意向があり、次回の日程を調整して活動を終わりました。

#### 11月19日（金） 【リースづくり】

参加者はものづくりが得意ということで、本所に残っていた材料を使って、リースの飾りつけを行いました。大人数の集団や男性との接触が苦手なので、今回は他団体との接触を避けるために室内での活動としましたが、次回は他団体がいない日に屋外の活動を行うよう調整をしました。

#### 11月26日（金） 【葉っぱのスタンプ（エコバックづくり）】

本所の別事業で好評だった「葉っぱのスタンプ」を実施しました。これまで拒んできた屋外で活動（スタンプの材料集め）を初めて行いました。退所時には男性職員もいる事務室に来室できるまでになりました。

#### 12月4日（土） 【焼き芋】

本格的な屋外での活動として、環境学習館上の営火場で焼き芋づくりを行いました。同じ女性スタッフとの4回目の活動であり、焚き火を囲むというシチュエーションも手伝って、学校のことなどを話すことができるようになりました。その中で「昨日、短時間だけど学校に登校できた」と話していました。

#### 12月13日（月） 【ウォークラリー】

屋外での活動の幅を広げることや、負荷の高い活動を行うことによる達成感を味わってほしいという願いから、ウォークラリーを実施しました。「疲れた」と話す参加者の表情は明るく、最後まで外で元気に活動を行うことができました。

## 12月24日（金） 【クリスマス会（カードゲーム）】

関わりを持つことができるスタッフの人数を増やすことを目標に、新たに女性スタッフを加え、「クリスマス会」と称して、屋内でカードゲームを行いました。初対面のスタッフを前にして、はじめは緊張した面持ちでしたが、すぐに打ち解け、会話をしながら楽しく活動することができました。次回も複数名のスタッフと活動を行うよう打合せをして、活動を終わりました。

## 1月15日（土） 【カードゲーム（諫早かるた等）】

参加者の不登校の経緯や家での様子について保護者から話を聞くために、母子別の活動を提案しましたが、参加者が拒否したため断念しました。本人は、学校の様子などを自分から話すようになりました。また、最近は午後から学校に行くことができおり、本所での活動を2月から月1回程度に変更することになりました。帰り際に、本所の男性職員と今日の活動や次回の内容等について初めて会話することができました。

## 1月22日（土） 【火おこし体験】

まい切り式火起こし器とファイヤースターターを使って、火起こし体験をしました。まい切式火起こし器では、火を起こすまで至りませんでした。できないことを達成したいという思いが強く、疲れていても何度も挑戦する姿が見られました。職員の異動により、次回から別の女性スタッフが対応することになることに少し不安を抱えているようでした。

## 2月27日（日） 【カラフル筆ペンアート】

本所の事業で好評だったカラフル筆ペンアートを行いました。制作活動が好きなこともあり、職員と一緒に集中して作品を作り上げていました。活動の最後に、次回から対応する新しいスタッフとの顔合わせを行い、緊張しながらも挨拶を交わすことができました。

## 7) 評価

### ① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

### ② 参加者、保護者、紹介者の声

#### ア. 参加者

- ・（自然の家の活動は）楽しいからまた来たい。楽しいことなら何でもやってみたい。

#### イ. 保護者

- ・ここでは、子供は楽しそうで、他の場所に比べて口数が多かった。
- ・自然の家に来たこと（本事業に参加したこと）が家を出るきっかけとなり、登校意欲が高まり、通学につながりました。
- ・今後、本人が希望すれば、（不登校児童・生徒対象の、複数人が参加する）キャンプにも参加させたいです。

ウ. 紹介者（諫早市少年センター）

- ・センターにはなじめなかったが、（自然の家での活動を通して）学校に通えるようになったことに喜びと驚きを感じている。改めて自然体験活動の効果の高さを感じました。

## 8) 成果と課題

### ① 成果

- ・家から全く出られず、不登校、ひきこもり状態にあった参加者が、本事業に繰り返し参加することによって、短時間であるが毎日学校に登校できるようになりました。
- ・大人数の集団や男性との接触が苦手だった参加者が、本事業で達成感を味わうことで、挑戦しようという気持ちが高まり、男性職員が在室する事務室に来室できるようになりました。
- ・当初はスタッフの質問に答えられず固まってしまっていた参加者が、本事業で同じスタッフと接することで、新たな人間関係を構築し、自分のことを素直に話せるようになりました。
- ・自然体験活動が青少年の自己肯定感の高揚につながることを、本事業を実施したことで実例を通して再確認することができました。

### ② 課題

- ・今年度は新型コロナウイルス感染症の流行等の影響もあり、参加者した生徒は1名にとどまりました。今後、不登校や引きこもりに悩む児童・生徒及びその保護者に向けた効果的な広報の方法を構築し、参加者を増やしていく必要があります。
- ・参加した1名以外にも本事業の趣旨に賛同し、子供を参加させたいと思う保護者がいましたが、本所までの交通手段を確保できず断念した家庭や、子供を説得できず当日になって参加を断念する家庭がありました。本所までの一步を踏み出させることの難しさを感じました。
- ・今年度は繁忙期を除いて実施することとしたが、参加者が継続参加を希望した場合、繁忙期の実施も検討する必要があります。本事業の参加者はその特性上様々な制約があるため、他の利用者との調整が難しくなる恐れがあります。

### ③ 今後の展望

- ・今後も不登校、引きこもりに悩む児童、生徒や保護者に寄り添った活動を続けていきたいと思えます。その際、最初の一步を踏み出すまで（本所に来所するまで）、本所職員がどこまで手を差し伸べるべきか、関係機関と連携を取りつつ、検討を重ねていくことを考えています。
- ・次年度以降、不登校児童・生徒の情報を持つ諫早市教育委員会、少年センターとの連携を密にし、事業を継続する予定です。
- ・今年度、対象を諫早市内に限定して実施しましたが、協力団体の中に、諫早市外の児童生徒を受け入れている医療施設等があるため、対象範囲の拡大も検討していきたいと思えます。

## 5. グローバル人材の育成を見据えた国際交流事業

### (1) 国内での国際交流事業

諫早市教育委員会委託事業

#### 「イングリッシュキャンプ」

～野外であそびながら英語を学ぼう～

令和3年10月2日（土）

【担当：和泉 志帆・望月 聡・大嶋 和幸】



#### 1) 事業の背景

新小学校学習指導要領（平成29年3月告示）において、中学年に外国語活動、高学年に外国語科が導入されました。外国語活動の目標1-(1)には、「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする」と明記され、外国語活動での体験学習の重要性が示されています。また、当機構の令和3年度教育事業等方針においても、青少年に係わる国の政策課題として、異文化理解の増進を図ることが取り上げられています。

本所では、平成30年度から諫早市教育委員会の委託を受け、小学校中学年を対象として、1泊2日のイングリッシュキャンプを実施してきました。

しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を踏まえ、日帰りで行いました。

#### 2) 事業の趣旨

自然の中で、英語を聞いたり話したりする活動を通して、外国人との交流や英語によるコミュニケーションの楽しさを実感させる。

#### 3) 目標

- ① 英語を用いて、主体的にコミュニケーションを図ることの楽しさや大切さを知る。
- ② 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付く。

#### 4) 対象

諫早市内の小学3～4年生

#### 5) 事業の実施

##### ① 期日

令和3年10月2日（土）

##### ② 参加者

諫早市内全28校のうち10校から29名が参加

	男	女	計
3年生	9	13	21
4年生	4	3	8
合計	13	16	29

③ 外部講師・補助スタッフ等

外部講師：諫早市のALT 5名（運営協力：諫早市教育委員会学校教育課 6名）

補助スタッフ：鎮西学院大学 現代社会学部外国語学科学生 6名

④ 日程

時間	内容
9:00	受付
9:15	始まりの会、仲良くなるゲーム ・アイスブレイク、自己紹介ゲーム等
10:30	英語を用いた活動 ・色や形をさがそう
12:00	昼食（レストラン）
13:00	葉っぱのスタンプ ・オリジナルエコバッグを作ろう
14:30	振り返り、終わりの会
15:00	解散

⑤ 活動の様子



**【始まりの会・仲良くなるゲーム】**

出会いの時間です。はじめは緊張した表情でしたが、英語で「じゃんけん」と「自己紹介」をし、交流を深めていきました。子供たちの目標は、「色や形を英語で表現すること」です。ゲームを通して、「red」「blue」「circle」「triangle」等、色や形の英語表現を学びながら活動しました。



**【英語を用いた活動】**

当日は天候に恵まれ、ALT や諫早市教育委員会の先生方、鎮西学院大学の学生たちと一緒に屋外でビンゴゲームを行いました。自然の中を散策しながら、様々な色や形を探します。子供たちは、求める色や形を見付けると、その形を英語で表現しながら、仲間と喜びを分かち合っていました。



**【葉っぱのスタンプ】**

自然の中から集めてきた葉っぱなどの自然物を使用し、エコバッグにスタンプをしました。子供たちはこれまでの活動で学んだ色や形の英語を使いながら、オリジナルの作品を作り上げました。



**【振り返り・終わりの会】**

お別れの時間です。最後に、葉っぱのスタンプで使った色を英語で表現しながら作品の発表会をしました。一緒に活動した ALT、諫早市教育委員会の先生方、スタッフの見送りの中、子供たちは笑顔で帰宅の途につきました。



## 6) 評価

### ① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
90%	10%	0%	0%

### ② 参加者の声

- ・できるだけ英語を話しました。少し難しかったけど、楽しかったです。
- ・いろいろな物を英語で言うのは難しかったけど、とても楽しく思えた。
- ・英語がもっと話せるようになった。友達と話すことがたくさんできた。
- ・英語で名前や好きな食べ物を言うことを頑張った。
- ・英語はいろいろな人とふれあえるから、もっと英語を勉強したい。
- ・もっと英語を覚えたい、話したい。
- ・形の英語を言って、形を（ロープで）作ることが難しかったけど、みんなの力をあわせて頑張りました。

## 7) 成果と課題

### ① 成果

当所は本事業の委託元である諫早市教育委員会から助言をもらい、小学3・4年生の英語教科・領域に関連付けた活動を企画し、実施することができました。

子供たちに、外国人との交流や、ネイティブな英語表現を体験してもらうために、今年度は鎮西学院大学現代社会学部外国語学科に依頼し、留学生や英語を勉強している大学生6名の協力を得ることができました。大学生たちはALTと一緒に、班活動をサポートしました。子供たちは英語でじゃんけんをしたり、外国の挨拶に触れたりすることで、楽しみながら自然に英語を話すことができました。

活動中、英語を使って色や形を表現することや、分からないことがあれば尋ねるなど、積極的に英語を使おうとする子供たちの姿が多くみられたことから、目標を達成することができたと考えます。

### ② 課題

今年度は日帰り1日での実施であったため、英語活動の時間を十分に確保できませんでした。英語に慣れ親しむという点では、日常生活の中で英語を活用し、身近に体感してほしいので、1拍2日が望ましいと考えます。

今後、宿泊で企画する場合、ALTの勤務時間の制限があるため、2日間の帯同は難しく、外国人の確保が課題だと考えております。

### ③ 今後の展望

今年度は、大学生が子供たちのサポートをしました。今後は、法人ボランティアの登録を促し、企画段階から事業運営に参画し、主体的に子供たちに関われるように支援したいと思います。

また、十分な英語活動を提供するために、大学生のみならず市内在住の外国人や、英語教室などの職種の協力を仰ぐなど、外国人の確保を考えていきたいです。

## 6. 青少年教育指導者等の養成・研修事業

### (1) 青少年指導者等の養成・研修事業

#### 自然体験活動指導者 (NEAL リーダー) 養成研修

令和3年12月26日(日)～28日(火)

【担当：園部 翔、東島 憲之】



#### 1) 事業の背景

独立行政法人国立青少年教育振興機構が提示している「自然体験活動指導者養成講習会企画運営ハンドブック」には、『子供の頃の体験は人生の基盤であり、豊富な体験が、大人になってからのモラル、やる気などの「生きる力」を養成している。近年、体力低下やいじめ・自殺、不登校・ひきこもりの増加など、青少年の抱える課題が問題となっているが、これらは子供の頃の様々な体験の機会が不十分であることも要因の一つだと思われる。かつては、子供たちが様々な体験活動を行う機会が日常的にあったが、現代では、体験活動の機会を意図的に提供することが必要になっている。そのためには、正しい知識と経験を有する指導者が必要である』と明記されています。

そこで、当所では全国体験活動指導者認定委員会が制定した「自然体験活動指導者養成カリキュラム」に則り、青少年向け自然体験活動プログラムにおいて、子供の発達段階に応じた適切かつ安全に指導できる自然体験活動指導者 (NEAL リーダー) を養成します。

#### 2) 事業の趣旨

自然体験活動指導者認定制度のもと、自然体験活動指導者 (NEAL リーダー) の資格取得に必要な講習会 (概論 I) を開催し、専門的な知識と技術をもって自然体験活動の普及や振興に貢献する指導者を養成する。

#### 3) 事業の目標

参加者が、今後の自然体験活動の指導で実践したい具体的な内容を見つける。また、目指したい指導者の理想像を描く。

#### 4) 対象

満18歳以上の者 20名

#### 5) 企画・運営の留意事項

##### ① 企画時

##### ア. 研修の構成の工夫

参加者が円滑に学べるよう「①共通の自然体験→②自然体験活動がもたらす効果の講義・実習→③リスクと隣り合わせの自然体験活動の安全管理の方法の講義・実習→④これまでの講義を踏まえて共通の自然体験の講義→⑤どのような指導をすべきか→⑥企画・運営時に重要な対象者理解の講義」と構成しました。

## イ. 研修内容の一連性の確保

上述の研修を6名の指導者で進めました。多くの指導者が講義を行うため、参加者がすべての講義・演習が一連となっていることを理解できるように、指導者に事業全体のねらいを共有し、担当する講義のねらいを明確にしました。

## ② 運営時

### ア. 導入の工夫

今回の研修には、年齢や職種の異なる14名が参加しました。一つの事象もこれまでの経験が異なれば見え方や捉え方に「ちがひ」が生まれます。本研修では、この「事象の捉え方の違い」を知ることが学びであることを参加者と確認しました。

## イ. 各講義にふりかえり（開き合い）の機会を設定

上述の学びの機会を保障するために、全員が学び合える雰囲気醸成に努めました。そのために、各講義の最後に個々の「気づいたことや考えていること」を2人1組（バディ）で話し合う場を設定しました。また、今後の指導場面においてどのように生かすかなど「日常化」について考える機会を設定しました。

## 6) 事業の実施

① 期日 令和3年12月26日（日）～28日（火） 2泊3日

## ② 講師

- ① 渡辺 直史 氏（プラムネット株式会社アウトドア共育事業部統括リーダー） 自然体験活動の安全管理
- ② 野口 美砂子 氏（NPO法人インフィニティ 理事長） 対象者理解
- ③ 杉谷 卓也 氏（佐賀県北山少年自然の家 指導課主任） 自然体験活動の技術④
- ④ 諫早自然の家職員 上記以外の講義・実習・説明

③ 参加者数 総計14名

職種	大学生	青少年教育関係者	学校教育関係者	その他	合計
人数	5	5	2	2	14

## ④ プログラム

12月26日（日）	12月27日（月）	12月28日（火）
<第1部>	7:30 朝食（パン食）	7:00 朝食（パン食）
10:00 受付・開講式	9:00 講義・実習 「自然体験活動の安全管理」	片づけ
10:30 ガイダンス①	12:10 昼食（弁当）	9:30 講義「対象者理解」
10:50 講義・実習 「自然体験活動の技術①」	<第2部>	11:00 ガイダンス②
12:30 昼食（参加者持参）	13:00 講義・実習 「自然体験活動の特質」	12:00 修了試験
13:30 講義・実習 「自然体験活動の技術②③」	16:00 講義・実習 「自然体験活動の技術④」	12:40 閉講式
16:40 夕食（弁当）	17:40 夕食（野外炊事）	
18:00 講義 「青少年教育における体験活動」	18:20 講義「自然体験活動の指導」	

## ⑤ 活動の様子



### 【NEAL ガイダンス①】担当：東島 憲之

導入として、NEAL とは何か、自然体験活動指導者に必要な知識・技術を学ぶために、本事業では体験者の視点で活動し、指導者の視点を持ってふりかえり、重要な内容を講師から伝えるという研修の進め方について確認しました。



### 【講義・実習】「自然体験活動の技術①」担当：園部 翔

学び合う雰囲気大切にするために、緊張をほぐせるようお互いを知り合える活動が重要であることを自身の体験と講義にて説明しました。

初めから全体で話すことは難しいため、少人数での話合いから最後は全体で話し合う活動構成にしました。



### 【講義・実習】「自然体験活動の技術②③」担当：園部 翔

自然体験活動の多くは、協働することの大切さを学ぶ機会になります。そのような活動を提供する上で、指導者自身が「協力することや挑戦することの大切さを再認識する」ことをねらいに「岩場のぼり」を行いました。

また、リスクと教育効果が比例することについて参加者に体感してもらうために、やや難易度の高いコースを選択しました。

活動後のふりかえりでは、岩場のぼり（自然体験活動）で気づいたことを、KJ法を活用して共有しました。



### 【講義】「青少年教育における体験活動」担当：蓮見 直子

岩場のぼりのふりかえりでは、参加者は特に自然体験活動の魅力について話し合っていました。そこで、「なぜ青少年教育で体験活動を行う機会を提供するのか」について講義を行いました。

その際、参加者同士のこれまでの経験と講義内容がつながるよう「よい体験とはどのような体験か」などについて話し合う場を多く設定しました。



### 【講義・実習】「自然体験活動の特質」

渡辺 直史氏によるオンラインで、「①自然体験活動の意義」と「②参加者の地域の特質」の講義・実習を行いました。

①では、渡辺氏が企画・運営されていた「アラスカキャンプ」の進め方や参加者の様子、キャンプ後の変化などについてお話いただきました。

②では、参加者が自身の地域で自然体験活動の機会提供の企画をする活動を通して、地域の特質について考えました。



**【講義・実習】「自然体験活動の安全管理」**

引き続き、渡辺 氏にお話をいただきました。

参加者は、(1) から (5) の講義・実習で自然体験活動や体験活動の意義を学びました。よい活動にするためには安全に活動できることが最重要であるため、この講義・実習では、「リスクをどのようにマネジメントしていくか」を学びました。



**【講義・実習】「自然体験活動の技術④」**

講師として、杉谷 卓也氏をお招きしました。

これまでの講義を踏まえた自然体験活動として「野外炊事」を行いました。

活動中は、参加者としての目線と支援者としての目線で活動することを通して、自身がどのような支援を行っていきたいかを考える機会にしました。



**【講義】「自然体験活動の指導」担当：園部 翔**

支援者として指導する際に、どのような心構えで支援に入るかを参加者で話し合いました。

指導の際、参加者は指導者の姿をお手本として見るため、言動や服装に気掛けることなどを確認しました。また、話し声の強弱や話す内容の可視化などを学びました。



**【講義】「対象者理解」**

講師として野口 美砂子氏をお招きしました。

安全管理の徹底や教育効果を高めるための重要な要素である「対象者理解」を本研修最後の講義に構成しました。

対象者理解の必要性や方法、各年齢期における発達課題があることなどを御講義いただきました。



**「NEAL ガイダンス②」担当：東島 憲之**

NEAL リーダーの資格取得に必要な手続きや、今後上位資格を取得するための演習について説明しました。

7) 評価

① アンケート結果

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

② 参加者の声

- ・雪の中の活動という決して恵まれたコンディションとはいえなくても実施していただけたことで、より一つ一つの活動内容、ちいさなチャレンジの積み重ねにも集中ができたし、なにより「自然体験活動」における事前準備の必要性やさまざまな

シミュレーション、即応性やリスクマネジメント、指導者や援助者、参加者それぞれのチーム意識の大切さなども初日から実感できたのがよかったです。

- ・初日に参加者としての「体感」からスタートしたことで、一つ一つの講義の理解が深まり、指導者目線、参加者目線、送り出す家族目線などいろんな立場で聴くことができました。
- ・講義内容の区切りがつくごとに、振り返りやまとめ、意見交換の時間があつたのがとてもよかったです。(頭の中では整理しきれないことを言語化できたり、感じ方捉え方の違いを感じたりできたので) 内容についても為になる話ばかりで、自分の課題やすべきことが明確になりました。
- ・リスクについて、事例を交えながらお話し頂いたので、とてもわかりやすく勉強になりました。またアラスカのキャンプのお話は、「特別な体験」で終わらず、自然体験活動を企画していくうえでの気づきになりました。
- ・命に関わる3つの視点や脊髄損傷の具体例などをお示しいただいたことは、これまでも救命救急講習にはない鬼気迫るものでもあり、指導者としてもっとしっかりリスクマネジメントの知識や技術を身につけたいと思えました。
- ・私は自然体験活動において知識や思考力の発達を期待できると思っていたが、知識が多くても感情が豊かでないと将来起き上がれない人になってしまうとわかりました。感情が動く体験とは何かを考えていきたいです。

## 8) 成果と課題

### ① 成果

参加が決定した対象者と連絡をとり、気になる点をよく確認した上で、講師と連絡を密にとり、優れた講師の方々の実体験や、参加者が研修中に体験して気づいた内容を踏まえた御講義、研修の構成や導入、ふりかえり等での言動の工夫をしたことで、参加者の満足度は全て最上位評価でした。参加者のアンケートや感想にも「一つひとつの活動のつながりがあり、学びやすかった」「指導者からだけでなく参加者同士で学び合える研修が良かった。」などが多くありました。

### ② 課題

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、昨年度に比べ、NEAL インストラクターの資格取得に必要な演習を実施された方が減少しました。次のステップを目指して演習を受ける方を確保していけるよう、NEAL 演習を受け入れられる事業の広報に努めていきたいです。

### ③ 今後の展望

本事業での講師に対する参加者の満足度は、実体験をもとにした具体的な内容のため、理解しやすいと、一様に高かったです。当所では本研修を実施するのが再来年度に予定されている状況です。次回もご講義いただけるよう、当所では指導者養成事業や職員研修を実施する予定なので、講師の方々と連絡を密にとっていきたいです。

## 教員免許状更新講習

第1回 令和3年 8月 28日 (土)

第2回 令和3年 9月 11日 (土)

第3回 令和3年 10月 2日 (土)

【担当：園部 翔】



### 1) 事業の背景

平成21年度から開始されている「教員免許更新制」は、その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目的としています。

今日の子供の現状として、基礎的な体力の不足、基本的な生活習慣や生活リズムの乱れ、学習意欲を持っていないことや多様な人間関係を結んでいく力や習慣の欠如などが指摘されるとともに、いじめ、不登校、引きこもり等の生徒指導上の課題が顕著に見られます。こうした問題の原因の一つとして、子供への保護者の関与の低さや地域の大人の関わりの少なさ、そして、自然とのふれあいや仲間との交流の少なさといった直接体験の不足があげられます。このような状況に対応するため、平成29年3月に告示された学習指導要領においては、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動、地域の行事への参加等、豊かな体験活動の重点的に推進するとしています。

体験活動の充実を図るためには、教員自らの体験を豊かにするとともに、教員が体験活動に関する基礎的な知識技能を身に付けることが求められます。そこで、小中学校や高等学校等に対して、集団宿泊活動において自然体験や生活体験等の機会を提供し体験活動の指導に関するノウハウを有している当所においては、集団宿泊活動における体験活動を中心に、教員が「実際に体験」し、「子供たちへの指導方法を学び」、併せて「学級経営や集団宿泊活動等への活用方策について考える」講習会を実施しました。

### 2) 事業の趣旨

新学習指導要領で示された「体験活動の充実」を踏まえ、体験活動に関する理解をより一層深めることで、教育内容の充実に資する。

### 3) 事業の目標

体験から学ぶための手法について、基本的な考え方や技術、展開方法を理解する。

### 4) 対象 全学校種教諭 40名

### 5) 事業の実施

#### ① 期 日

第1回 令和3年 8月 28日 (土)

第2回 令和3年 9月 11日 (土)

第3回 令和3年 10月 2日 (土)

② 講師 全開催回共通

講師	講義・実習担当
小原 達郎 氏 (長崎大学名誉教授) 諫早自然の家職員	学校教育における体験活動 上記以外の講義・実習・説明

③ 参加者数 総計 100 名

開催回	合計	学校種
第 1 回	31 名	幼稚園・保育園・こども園等 7 名 小学校 11 名 中学校 9 名 高等学校 3 名 特別支援学校 1 名
第 2 回	32 名	幼稚園・保育園・こども園等 11 名 小学校 11 名 中学校 7 名 高等学校 3 名
第 3 回	37 名	幼稚園・保育園・こども園等 7 名 小学校 4 名 中学校 10 名 高等学校 14 名 特別支援学校 2 名

④ プログラム 全開催回共通

時間	内容
8:20	受付
8:50	開講式、オリエンテーション
9:00	学校教育における体験活動
10:00	体験学習法の理論講習 セッション 1 ・理論の土台となる体験
11:10	セッション 2 ・体験を意味づける抗議
12:00	昼食
13:00	セッション 3 ・理論を確認する体験
15:35	セッション 4 ・体験や理論のまとめ
16:20	修了試験
16:50	閉講式

⑤ 活動の様子 全開催回共通



**【学校教育における体験活動】**

長崎大学名誉教授小原 氏に「学校教育における体験活動の位置づけ」や「体験活動の意義」についてお話しいただきました。

体験活動の意義では、自身の体験談を踏まえながらお話しされていたので参加者は、時に笑ったり、深くうなずいたりとされていました。





### 【セッション1】

子供たちに活動を提供する上で、指導者自身が「協力することや挑戦することの大切さを再認識する」をねらいに活動しました。

その後、振り返りの手法の1つである「Being<sup>\*1</sup>」を活用して、個人及びグループの目標を設定し、「課題解決」のゲームをしました。参加者の方々は、グループのメンバーと少しずつ打ち解けはじめ、会話も増えていきました。

初めに、「心の安全」や「自己開示」のゲームを行い、参加者の心を解きほぐしました。初めは硬かった参加者の方々の表情は次第に笑顔になり、ゲームに取り組んでいました。

\*1 体験を通して得られた気づきや学びを模造紙等へ書き込み、メンバー間で共有する振り返りの方法のこと



### 【セッション2】

セッション2からはセッション1で形成したグループで活動しました。

子供たちが自然体験活動を通して主体的に学んでいくための「指導者の関わり方」をお話ししました。

具体には、「フルバリューコントラクト<sup>\*2</sup>」や「チャレンジバイチョイス<sup>\*3</sup>」「ふりかえり時に何をふりかえるとよいのか」等、指導の基盤となる考え方についての講義を行い、理解を深めました。

参加者の方々は、グループのメンバーと少しずつ打ち解けはじめ、会話も増えていきました。

\*2 お互いの努力を最大限に評価する(認め合う)というグループ活動をする上での約束のこと

\*3 個人の挑戦レベルとその方法は、自分自身が決定するという、活動を行う上での約束のこと



### 【セッション3】

セッション1、2を踏まえての活動となること、また、リスクと教育効果が比例することについて参加者に体感してもらうために、やや難易度の高い「オリエンテーリング」と課題解決ゲームを織り交ぜて行いました。

活動中は、参加者としての目線と支援者としての目線で活動することを通して、自身がどのような支援を行っていきたいかを考える機会にしました。

活動後のふりかえりでは、「Being」を活用して、体験して気づいた指導者として子供に携わる時に大切にしたいことを、共有しました。



#### 【セッション4】

最後に、「体験学習法の特徴」や「体験学習法を行うときの指導者の役割」、「Beingの学校での活用例の紹介」についての講義を行い、研修での講義を締めくくりました。

研修を終えた参加者の方々は、皆、充実した表情で会場を後にされました。

## 6) 評価

### ① アンケート結果

開催回	満足	やや満足	やや不満	不満
第1回	87%	13%	0%	0%
第2回	94%	6%	0%	0%
第3回	92%	8%	0%	0%

### ② 参加者の声

- ・学級経営でのふりかえりを深くするための具体的な声掛けや技術を実際の活動の中で実践してもらえたので、理解しやすかったです。
- ・子供たちの支援をする際に意識したいことがたくさん見つかる講義内容だった。
- ・コロナ禍での実施だったが、会場の変更や手指消毒の各活動班へ配布することなど、様々な配慮があったので安心して受講できました。
- ・受講時、私はけがをしていたので野外活動を行えない状況だったが、職員さんが多くの配慮をしてくださりました。宿泊学習でも私と同様に活動に参加できない子供がいる際には、今回を参考にして、活動ができない子供の学びにも配慮したいです。
- ・本講習で普段お会いしない教員の方と、多くの意見交換をして学び合うことができました。意見交換の重要性を感じることができたので、学級経営に生かしたいです。
- ・講義と実習が交互に行われていたこと、体験をベースに講義内容の伝え方を工夫されていたこと、参加者同士の学び合いがあったので、大変有意義な時間になりました。
- ・一つ一つの活動のつながりがあり、学びやすかった。
- ・指導者からだけでなく参加者同士で学び合える研修が良かった。

## 7) 成果と課題

### ① 成果

コロナ禍の状況で長崎大学と相談の上、体験活動を踏まえながら安全に講習を実施することができました。

多様な学校種の教諭が参加される中、学校種を超えて学び合える講習会を実施することができました。

② 課題

本講習は長崎大学が開設者として、自然の家が会場となり企画・運営しています。本講習は、選択科目「学校教育と野外体験活動」ですが、受講者から「もっと理科について講義があると思っていた」という指摘がありました。希望者に対しては、目的や活動内容を明確に記載するなど、情報提示について見直しが必要です。

③ 今後の展望

次年度以降は、教員免許更新制度の発展的解消に向けた法改正の検討が行われていることから、長崎大学では実施しない方向となった。したがって当所では開設しないこととなったが、教員対象の研修として、これまでの教材やノウハウ、実績は今後に生かしていきたいと考えています。

## グループをチームに育てる プログラム研修会（体験編）

佐賀会場 令和3年5月29日（土）

長崎会場[1] 令和3年6月26日（土）

長崎会場[2] 令和3年8月25日（水）

【担当：大嶋 和幸】



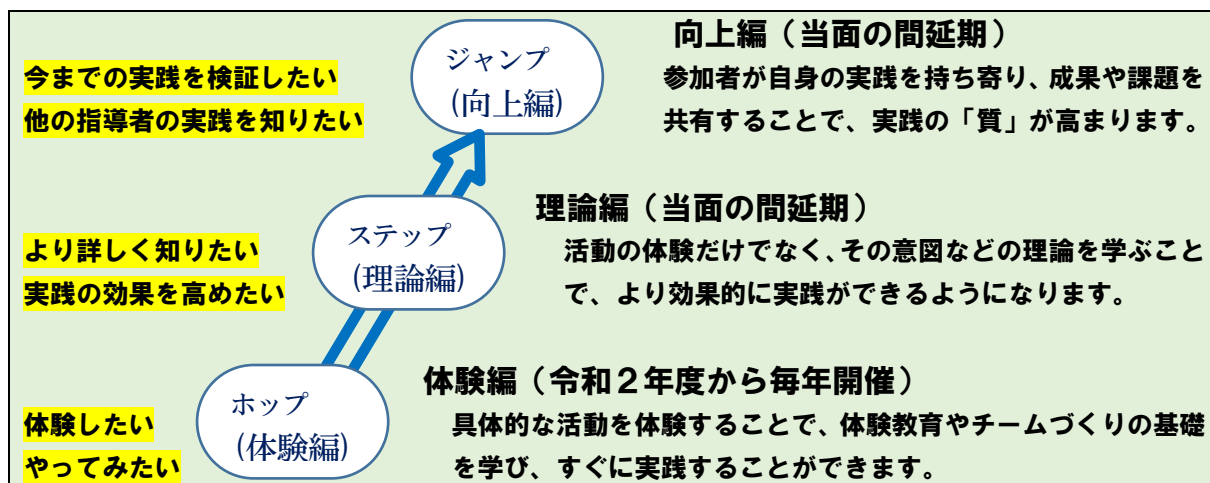
### 1) 事業の背景

当所では、学級集団やクラブチームなどのグループづくり・人間関係づくりに役立つプログラムの一つとして、「プロジェクトアドベンチャー」などに代表される体験教育・アドベンチャー教育プログラムの実践・普及に力を入れています。

この教育プログラムは、「自己との対峙」「葛藤」「自分自身に対する挑戦」「仲間との協力」といったアドベンチャーの特性を生かし、人間が成長するための「気づき」を効果的に体験するための手法として開発された教育手法であり、積極的に挑戦する意欲や姿勢、困難な状況を乗り越えることにより得られる達成感など、自己肯定感の向上が期待できるものです。

そこで、昨年度、3年間継続して受講することで、「体験教育・アドベンチャー教育プログラム」を自信をもって実践できる指導者の養成を目的とした事業を企画し、初年度として「体験編」を開催しました。

しかし、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、事業の中止や参加者の制限をせざるを得ない状況になったことから、当面の間、「体験編」のみを開催することとしました。



### 2) 事業の趣旨

グループの力を生かすプログラムの体験を通して、体験教育・アドベンチャー教育の基本となる手法や理論の習得を図る。

### 3) 目標

- ① グループの力を生かす「体験学習法」について、理論的に説明できる。
- ② 「体験学習法」に基づいた活動プログラムを具体的に展開できる。

#### 4) 対象

学校教育関係者、スポーツクラブ指導者、社会教育関係者、企業研修担当者、大学生、高校生など

#### 5) 事業の実施

##### ① 事業計画

会場	実施会場、日程等
佐賀	実施会場：佐賀県波戸岬少年自然の家 開催日：令和3年5月29日(土)
長崎1	実施会場：国立諫早青少年自然の家 開催日：令和3年6月26日(土)
長崎2	実施会場：国立諫早青少年自然の家 開催日：令和3年8月25日(水)

※新型コロナウイルス感染症感染拡大のため、長崎会場においては、参加者を長崎県内在住者に限定して開催しました。

##### ② 参加者

会場	内訳
佐賀	青少年施設職員 14名 ※主催、共催施設職員を含む
長崎1	教職員・保育士 9名 青少年施設職員等 3名 ※本所学生サポーターを含む その他 2名 計14名
長崎2	教職員・保育士 5名 ※本所社会体験研修員を含む 青少年施設職員等 2名 計7名

##### ③ 日程

日程は各会場共通とし、参加者の構成、会場の状況に合わせて体験する活動プログラムを調整しました。

時間	内容
9:30	受付
10:00	開講式
10:10	セッション1 ・グループづくりの基盤(約束事) ・フルバリューコントラクト
11:15	セッション2 ・グループとチーム ・チームの成長
12:00	昼食
13:00	セッション3 ・コンテンツとプロセス ・体験活動サイクル ・チャレンジバイチョイス
15:30	セッション4 ・振り返りの方法 ・指導者の役割
16:00	閉講式

#### ④ 活動の様子



##### 【セッション1】

初めに、グループづくりの基盤となる「心の安全」や「自己開示」のゲームを行い、参加者の心を解きほぐしました。初めは硬かった参加者の方々の表情は次第に笑顔になり、ゲームに取り組んでおられました。

活動後には「フルバリューコントラクト<sup>\*1</sup>」や「チャレンジバイチョイス<sup>\*2</sup>」等、活動の基盤となる考え方についての講義を行い、理解を深めました。

\*1 お互いの努力を最大限に評価する(認め合う)というグループ活動をする上での約束のこと

\*2 個人の挑戦レベルとその方法は、自分自身が決定するという、活動を行う上での約束のこと



##### 【セッション2】

セッション2からはセッション1で形成したグループで活動しました。

アイスブレイクを兼ねた自己紹介の後、「グループとチームの違い」や「チームの成長」についての講義を行いました。

その後、振り返りの手法の1つである「Being<sup>\*3</sup>」を活用して、個人及びグループの目標を設定し、比較的負荷の小さい「課題解決」のゲームをしました。参加者の方々は、グループのメンバーと少しずつ打ち解けはじめ、会話も増えていきました。

\*3 体験を通して得られた気づきや学びを模造紙等へ書き込み、メンバー間で共有する振り返りの方法のこと



##### 【セッション3】

初めに体験活動プログラムの基盤となる「体験学習法」についての講義を行いました。(長崎編[1]では、セッション3をロープスコース<sup>\*4</sup>で行うため、講義をセッション2の後半で実施しました。)

その後「体験学習サイクル<sup>\*5</sup>」を体験するゲームや、仲間と協力することが成功の鍵となるゲームなど、様々なゲームを行い、理論と実践をつないでいきました。

参加者の方々は一つ一つ活動の意図を考えながら、真剣に取り組み、グループがチームになる過程を体感されていきました。

\*4 エレメントと呼ばれるアドベンチャー教育専用コースが設置された屋外施設のこと

\*5 体験からの学びを分かりやすくモデル化したもの



#### 【セッション4】

最後に、体験を次の行動につなげるための「振り返り」の方法や、グループの活動をファシリテートし、チームに育てるための指導者の役割等についての講義を行い、研修を締めくくりました。

研修を終えた参加者の方々は、皆、充実した表情で会場を後にされました。

## 6) 評価

### ① アンケート結果（研修全体に対する満足度）

会場	満足	やや満足	やや不満	不満
佐賀	100%	0%	0%	0%
長崎1	92%	8%	0%	0%
長崎2	86%	14%	0%	0%

### ② 参加者の声

- ・講義と活動を同時に行うことで、座学では伝わらないことを体で感じる事ができ、深い学びにつながった。
- ・すぐに使える活動のアイデアを得られ、何となくやっていたことの理論化ができた。
- ・今日学んだ活動は、今後ぜひ活用して、子供たちと一緒に楽しみたい。
- ・違いが良さに変わる事、チームで動く楽しさ、気持ちよさを実感できた。
- ・自分では思いつかない発想や考え、思いを全員が認め合うことで、チームの雰囲気、すばらしいチーム作りにつながることを学んだ。
- ・グループがチームになっていくことを実感でき、その手順ややり方を学べた。
- ・Beingの時間を毎回とることで、何が必要なのかを整理できた。
- ・体験教育、アドベンチャー教育の理論から手法、技術までをしっかりと学ぶことができた。

## 7) 成果と課題

### ① 成果

参加者の満足度は高く、今後活用していきたいという声が多く聞かれたことから、本研修会が体験教育プログラムの普及に一定の効果があることがわかりました。また、様々な職種の方が一緒に活動することで、異なる視点からの考え方を共有することができ、学びの深まりにつながりました。

### ② 課題

今年度も、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響から、参加者を制限せざるを得なくなり、「研修会を通して本プログラムを広く指導者に普及する」ことを十分にはできませんでした。

また、昨年度の反省から、開催日を年度初めに変更しましたが、その分広報期間が短くなり、会場によっては参加者が集まらない結果となりました。

③ 今後の展望

参加者からより多くのゲームや、より深い理論を望む声が聞かれることから、今年度は計画していない「理論編」の開催や、「体験編」の参加者が、その後の各職場での実践を紹介しあうような新たな研修会の実施を検討していきたいと思います。

一方、新型コロナウイルス感染拡大以前から宿泊を伴う研修への参加を躊躇する声があり、より参加しやすい実施方法を考えていく必要があります。

今後は、新型コロナウイルス感染症の流行状況を鑑みながら、体験教育プログラムのさらなる普及を目指して、様々な取組を行っていききたいと思います。



## (2) ボランティアの養成研修

### 自然体験活動ボランティア養成研修

①令和3年6月19日(土)～20日(日)

②令和3年7月18日(日)

【担当：園部 翔、葛島 隆文】



#### 1) 事業の背景

青少年が地域や施設でのボランティア活動を通じて、多くの方に出会い、広く社会を学び、自分自身の発見や成長につながる貴重な体験となることに違いありません。独立行政法人国立青少年教育振興機構国立諫早青少年自然の家(以下、機構という。)では、社会で活躍できるボランティア(青少年)に成長してくれることを期待し、法人ボランティア制度を設け、子供たちの体験活動を支援する機会を提供しています。

法人ボランティアとして活動しようとする青少年に対して、円滑に教育事業や研修支援等の運営協力・指導補助を行えるよう、青少年教育の知識や技術を取得し、ボランティア活動への参加意欲を高めることを目的に、毎年ボランティア養成研修事業を実施しています。

今年度は、令和3年6月19日(土)～20日(日)1泊2日のみを計画していたが、新型コロナウイルス感染症の感染者拡大により、実施1週間前に県内大学の約20名からキャンセルを受けたこととともに、別日程を設けることができないかとの依頼を受けた。

これを受け、7月18日(日)の日帰り研修およびオンデマンド講義の受講により、対応することとしました。

#### 2) 事業の趣旨

青少年の体験活動事業で活動するボランティアスタッフに求められる基礎的な知識・技術を習得するとともに、ボランティア活動への参加意欲を高める一助とします。

#### 3) 事業の実施

① 対象 高校生以上、一般 30名

② 期日

ア. 令和3年6月19日(土)～20日(日) 1泊2日

イ. 令和3年7月18日(日)、オンデマンド講義、レポート作成

③ 参加費

ア. 2,300円

イ. 550円

④ 参加者数 延べ42名

ア. 参加者合計 17名(内訳：高校生5名、大学生9名、社会人3名)

イ. 参加者合計 25名(内訳：高校生4名、大学生19名、社会人2名)

⑤ プログラム

ア.

1 日目		2 日目	
10:00	受付、開講式	7:00	朝食（レストラン）
10:30	<u>【講義・実習】自然の中に飛び込もう！①</u> （ボランティア活動の技術 60分）	8:20	<u>【説明】登録などはどうしたらいいの？</u> （青少年教育施設における ボランティア活動② 30分）
11:30	昼食（持参）・休憩	9:00	<u>【講義】なんで自然体験が大事なの？</u> （青少年教育 90分）
12:15	<u>【講義・実習】自然の中に飛び込もう！②</u> （ボランティア活動の技術 180分）	10:40	<u>【講義】諫早自然の家ってなに？</u> （青少年教育施設の現状と運営 60分）
15:25	<u>【講義・実習】応急手当を知ろう①</u> （自然体験活動の安全管理① 90分）	12:10	昼食（レストラン）・休憩
17:10	夕食（レストラン）・休憩	13:10	<u>【説明】どうやったら活動に参加できるの？</u> （青少年教育施設における ボランティア活動② 30分）
18:15	<u>【講義・実習】応急手当を知ろう②</u> （自然体験活動の安全管理② 90分）	13:50	<u>【講義】活動時の心構えについて</u> （ボランティア活動の意義 90分）
19:45	<u>【説明】どんなボランティア活動ができるの？</u> （青少年教育施設における ボランティア活動① 60分）	15:15	閉講式
21:00	入浴・就寝		

イ.

1 日目	オンデマンド講義内容
10:00	自然体験活動の安全管理
10:15	青少年教育の理解
10:30	青少年教育施設の現状と運営
10:45	青少年教育施設におけるボランティア活動②
11:00	ボランティア活動の意義
11:15	
11:30	
11:45	
12:00	
12:15	
12:30	
12:45	
13:00	
13:15	
13:30	
13:45	
14:00	
14:15	
14:30	
14:45	
15:00	
15:15	
15:30	
15:45	
16:00	
16:15	
16:30	
16:45	
17:00	
17:15	
17:30	
17:45	
18:00	
18:15	
18:30	
18:45	
19:00	
19:15	
19:30	
19:45	
20:00	
20:15	
20:30	
20:45	
21:00	
21:15	
21:30	
21:45	
22:00	
22:15	
22:30	
22:45	
23:00	
23:15	
23:30	
23:45	
24:00	
24:15	
24:30	
24:45	
25:00	
25:15	
25:30	
25:45	
26:00	
26:15	
26:30	
26:45	
27:00	
27:15	
27:30	
27:45	
28:00	
28:15	
28:30	
28:45	
29:00	
29:15	
29:30	
29:45	
30:00	
30:15	
30:30	
30:45	
31:00	
31:15	
31:30	
31:45	
32:00	
32:15	
32:30	
32:45	
33:00	
33:15	
33:30	
33:45	
34:00	
34:15	
34:30	
34:45	
35:00	
35:15	
35:30	
35:45	
36:00	
36:15	
36:30	
36:45	
37:00	
37:15	
37:30	
37:45	
38:00	
38:15	
38:30	
38:45	
39:00	
39:15	
39:30	
39:45	
40:00	
40:15	
40:30	
40:45	
41:00	
41:15	
41:30	
41:45	
42:00	
42:15	
42:30	
42:45	
43:00	
43:15	
43:30	
43:45	
44:00	
44:15	
44:30	
44:45	
45:00	
45:15	
45:30	
45:45	
46:00	
46:15	
46:30	
46:45	
47:00	
47:15	
47:30	
47:45	
48:00	
48:15	
48:30	
48:45	
49:00	
49:15	
49:30	
49:45	
50:00	
50:15	
50:30	
50:45	
51:00	
51:15	
51:30	
51:45	
52:00	
52:15	
52:30	
52:45	
53:00	
53:15	
53:30	
53:45	
54:00	
54:15	
54:30	
54:45	
55:00	
55:15	
55:30	
55:45	
56:00	
56:15	
56:30	
56:45	
57:00	
57:15	
57:30	
57:45	
58:00	
58:15	
58:30	
58:45	
59:00	
59:15	
59:30	
59:45	
60:00	

⑥ 講師

ア. Waku Waku あそBE 隊 代表 薄井 良文 氏 安全管理

ア. イ. 諫早自然の家職員 その他 講義・実習・説明

4) 企画・運営の留意事項

① 企画時の留意事項

ア. 大学、高等学校と学生の参加に関する確認

今般の新型コロナウイルス感染症感染防止対策により活動制限を大学がとっているため、近隣大学、参加希望があった高等学校と学生の参加についての確認を行ないました。

## イ. プログラム構成

本研修の目的は当所でのボランティア活動に必要な知識・技術を伝えることでしたが、自然体験活動やボランティア活動の経験が少ない参加者がいることを前提とし、自然体験活動の素晴らしさを全員で体感し、その共同体験を活用しながら必要な知識を伝えられるよう構成しました。

## ウ. 広報の工夫

チラシを作成し、対象者がいる場所に足を運んで行う足で稼ぐ広報に加え、動画を活用して活動の様子が具体的なイメージができるよう広報を行いました。

また、当日上映する動画の作成や広報は、先輩ボランティアが中心となって実施しました。

## ② 運営時の留意事項

### ア. 参加者同士での学び合い

子供たちのキャンプと同様、講師や自然の家職員から一方的に学ぶのではなく、共に参加している人同士で学び会えるように、ふりかえりの機会を多く設定しました。

## イ. 先輩ボランティア（ロールモデル）を配置

当所で活動を行なっている先輩ボランティアが運営ボランティアを行うことで、参加者が具体的なイメージを持てるようにしました。また、自然体験活動を一緒に行うことで活動中に多くの話ができるようにしたり、講義の中でこれまでのボランティア活動を通して自身の成長につながっていることなどを話す機会を設けたりしました。

## ウ. 多くの職員との関係構築

今後のボランティア活動を円滑に進めるためには、多くの職員との関係構築が重要であると考え、担当以外の職員にも携わってもらえるよう、調整しました。

## エ. 研修で学んだことを日常に落とし込む工夫

これまで研修を終えた参加者に「日常でどのように生かせるか」と問うと悩んでしまうことを見かけることがありました。そこで、「日常でどのように生かすか」まで研修中に考え、お互いに共有することでさらに充実した研修となる工夫をしました。

## オ. 2日間の各講義の関連付け

多くのカリキュラムがある本研修では、参加者が各講義をコマ切れに理解すると学びが浅くなりがちです。これを避けるために、導入時にねらいを明確にすること、各講義で重要なポイントなどを記したホワイトボードを参加者が見られるように残し、別のカリキュラムでも活用することで、各講義を関連付けたカリキュラムとしました。

## 5) 各講義の進め方

講義科目	講義内容
(1) 「開講式」	本研修のねらい、研修を通して考えること、研修の中での全員のルールを共有しました。
(2) 【講義・実習】 「ボランティア活動の技術①」	開講式で共有したルールを意識づけるために、アイスブレイクを活用しました。 また、実際にボランティアとして活動するキャンプの参加者の心境は、現在の参加者の心境と同じ状況であるため、自身の心の変化にも注目するよう説明しました。
(3) 【講義・実習】 「ボランティア活動の技術②」	自然の家での活動を実際に体験し、その魅力を感じてもらえるように、比較的的心理的負荷が大きいオリエンテーリングを選択しました。 また、各チームの支持的風土が醸成されるようオリエンテーリングポスト地点で、チームで協力して行う課題解決ゲームを行ないました。 活動後にはオリエンテーリングを通して感じたことを共有しました。その後に、アイスブレイクの扱い方、オリエンテーリングをなぜ序盤に入れたかを説明しました。
(4) 【講義・実習】 「安全管理」	自然体験活動の魅力を感じた参加者に、魅力を感じるためには安全管理が重要なことを伝えました。また、講師に薄井良文氏を招き、事故が起きてしまった時の応急処置や応急搬送方法について、深い学びとなるよう、参加者の実習を中心に進めていただきました。 参加者からは、薄井氏が「応急処置などはいくら学んでも傷病者の原因を正しく把握できなければ役に立たない」と導入時に話されたことが印象に残ったという声が多く聞かれました。
(5) 【説明】 「青少年教育施設におけるボランティア活動①」	このプログラムは、先輩ボランティアが企画・運営しました。 先輩ボランティアが、ボランティア活動を通して「感じたこと」「自身の変化」「大変だったこと」などを自由に話しました。
(6) 【説明】 「青少年教育におけるボランティア活動②」	法人ボランティアに登録をすることでできることについて、説明を行ないました。
(7) 【講義】 「青少年教育」	1日目の自身の活動を振り返る中で、体験活動の重要性について当機構の調査研究結果を用いて伝えました。参加者からは「振り返りが重要。他者の意見に触れる中で、自身の考えを見つめ直すことで刺激になる」などの意見が聞かれました。

<p>(8) 【講義】 「青少年教育施設の現状と運営」</p>	<p>当機構の概要、長崎県や佐賀県の青少年教育施設について説明する中で『佐賀・長崎地域ぐるみで「体験の風をおこそう」推進事業』の取り組みを説明しました。</p> <p>また、当日に実施していた「キャンプの日」の運営を実際に観にいき、スタッフの指導方法やプログラム、プログラムを行なっている参加者の様子を学びました。</p>
<p>(9) 【説明】 「青少年教育施設におけるボランティア活動②」</p>	<p>法人ボランティアの登録方法について、ボランティアサイトマニュアルを用いて説明しました。</p>
<p>(10) 【講義】 「ボランティア活動の意義」</p>	<p>法人ボランティア活動時の心構えや法人ボランティアの立ち位置、保護者や参加者からの見られ方、ボランティア活動の意義を伝えました。</p> <p>また、これまで学んだことを通して、ボランティア活動がどのようなものだと考えるか、ふりかえりを行ないました。</p>
<p>(11) 「閉講式」</p>	<p>2日間の研修を通して、気づいたことなどから日常生活でどのように生かせるかを個人で考え、班内、参加者全体でふりかえりを行ないました。</p>

## 6) 評価

### ① アンケート結果

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

### ② 参加者の声（アンケートから一部抜粋）

- ・1日目体験、2日目講義の構成だったため、自身の体験と照らし合わせながら学べてよかった。
- ・子供の成長や子供の発言や行動を見て、一緒に時間を過ごすことで自分も成長できるようにボランティア活動をしたと思った。
- ・魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えることが重要なことだと学んだ。
- ・発達段階によって介入方法を変えることなど子供のコミュニケーションの取り方について学べてよかった。
- ・多様な人と関わる中でたくさん学べることが分かったので、今後ボランティア活動に参加したい。
- ・人と関わるのが苦手だが、アイスブレイクなどを使った導入を行うことで、仲が深まるスピードが早まるのが体験を通して分かった。
- ・人との関わりで相手を「枠」にはめたり、先入観で接し方を変えたりするべきではない理由を学べた。
- ・新しいことに挑戦する大切さを学べた。人の意見や考えにふれ共有することの重要性を感じられたことが刺激になった。人の心の動かし方や最初（導入）の大切さが体感できた。

- ・ボランティアの場での出会いが素敵だと感じられた。短い時間でも色々なことにチャレンジして、自分たちの考えを伝え合いながら協力し合える場所だと感じたため。
- ・一歩前へ（いつもの自分の枠から飛び出てチャレンジすること、2日間の研修の中で大切にすることと開講式でみんなの約束とした）出ることの大切さを体感した。
- ・まずはやってみると多くの学びが待っているように思えた。1泊2日の間で時間も心も充実していて参加してよかった。自分の中の可能性を広げられるような気がした。
- ・もっといろんな人と出会いたいと思った。

## 7) 成果と課題

### ① 成果

- ア. ふりかえりを多く行うことで、上記の参加者のアンケートにも出ているように「想いを共有することで刺激し合える」など多くの研修での学びについて記載がありました。
- イ. 広報の工夫を「4企画・運営の留意事項（1）企画時の留意事項③広報の工夫」のとおり行なったことで、55名からの申込をいただきました。

### ② 課題

当初 55 名からの申し込みがあったが、国内の新型コロナウイルス感染者の激増により、県外の高校生や大学生、申込者が在学する大学の指示による一斉キャンセルなど 24 名からキャンセルを受けました。今後、新型コロナウイルス感染症がどのような影響を及ぼしていくか分からないため、実施時期は検討する必要があると感じました。

### (3) ボランティアによる自主企画事業

#### チャレンジキャンプ ～みんなで乗り越えよう 真冬の大冒険～

令和3年12月18日(土)～19日(日)

【担当：園部 翔】



#### 1) 事業の背景

ボランティア活動は、青少年の自立や健全育成、社会参画を促進する上で重要な役割を果たしています。そのため、当機構では各施設のボランティア・コーディネーターが法人ボランティアに対し継続的な教育的支援を実施しています。

本事業は、その一環として、各施設の法人ボランティアが自主企画事業を実施するにあたり、ボランティア・コーディネーターがその企画立案時から指導・助言に携わるとともに、事業運営における安全管理等に関わり、法人ボランティアが学びと活動を循環させながら成長していくための一助となることを目的として実施しました。

#### 2) 事業の趣旨

ボランティア自身が主体的に企画・運営する自主企画事業を通して、法人ボランティアの活躍の場や機会の充実を図り、ボランティアを育成する。

#### 3) 事業の目標

ボランティアが事業の企画を体験し、多様な考え方や価値観に出会い自己成長を図る。  
ボランティアが企画・運営を通して、次の行動目標を見つける。

#### 4) 対象

国立諫早青少年自然の家に登録している法人ボランティア 10名程度

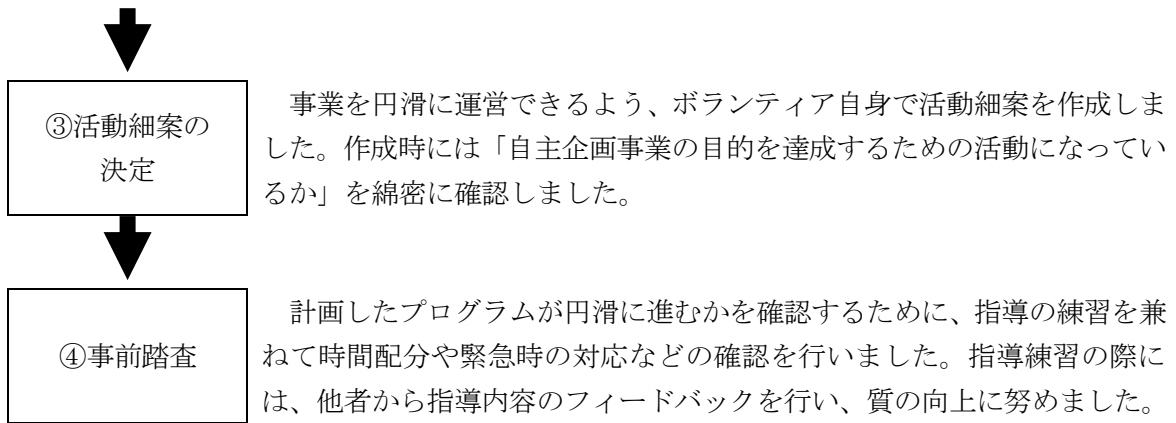
#### 5) 企画の流れ

①ボランティア  
プログラム  
体験会の実施

「ボランティアのスキルアップ」と「新しいボランティア自主企画事業の実行委員を募る」ことを目的に体験会を実施しました。子供たちの活動を支援する前に、自身が様々な体験をすることで、より具体的な指導を行えるように実行委員である先輩ボランティアが企画しました。

②企画研修

「企画について知る」、「事業を企画する」ことを目的に実施し、自主企画事業の目的や対象、募集人数などを決定しました。  
今後、スムーズに企画を行えるよう、実行委員のスケジュールを確認し、会場や時間の設定を行いました。



## 6) ボランティア自主企画キャンプの実施

### ① 名称

チャレンジキャンプ ～みんなで乗り越えよう 真冬の大冒険～

### ② 趣旨

新しい仲間と協力して行う自然体験活動を通して、人との関わりを大切にする心を育む一助とする。

### ③ 目標

- ア. 友達いるからできる活動があることを知る。
- イ. 新しい友達を作るために必要なことを考える。

### ④ 対象

小学校 3～4 年生 30 名

### ⑤ 期日

令和 3 年 12 月 18 日 (土) ～12 月 19 日 (日) 1 泊 2 日

### ⑥ 参加者数 総計 24 名

	男子	女子	合計
3 年生	9	5	14
4 年生	5	5	10
合計	14	10	24

### ⑦ プログラム

	12 月 19 日 (日)
12 月 18 日 (土)	
10 : 00 受付	6 : 30 起床・朝食 (レストラン)
10 : 30 オープニング	9 : 00 オリエンテーリング
11 : 30 昼食 (持参)	12 : 00 昼食 (弁当)
12 : 00 ハイキング	14 : 30 クロージング (保護者参観)
15 : 00 野外炊事	15 : 00 解散
20 : 00 入浴・就寝	



## ⑧ 活動の様子



### 【オープニング】

初めて出会う子供たちの緊張感を和らげるために、じゃんけんゲームや、自己紹介ゲームを行いました。

ボランティアも、緊張の面持ちでしたが、子供たちの明るい表情や言動を確認できたことで、表情が和らいでいきました。



### 【ハイキング】

新しい友達と協力して達成する楽しさを感じてもらうために、ハイキングに課題解決ゲームを織り混ぜて実施しました。

ボランティアは、オープニング時におとなしかった子供が野外活動を行う中で、リーダーシップを発揮していく様子に自然体験活動の魅力を確認していました。



### 【野外炊事】

一人一人の存在が重要であることを認識してもらうために、野外炊事を行いました。

子供たちは、「全員でおいしいご飯を食べる」を目標に役割分担を行い、協力して豚汁を作りました。

豚汁を食べながら、「僕が火をつけた」「私が野菜を切った」「食器を洗った」と自分ができたことを話す子供たちに「もし、誰か一人でもいなかったら豚汁を食べられたかな、みんながいたからできたね」と声をかけると、子供たちは「うん」と答えていました。

子供たちは、野外炊事を通して、一人一人の存在が重要であることを認識していました。



### 【オリエンテーリング】

1日目の活動を通して、互いに認め合い、支え合う風土を醸成した子供たちは、2日目に本キャンプのメインプログラムとしてオリエンテーリングを行いました。

これまでは、近くに自分の活動班以外の多くの友達やボランティアがいましたが、この活動は、冬山の中で班のメンバーだけで意思決定をして課題を解決する時間です。

ボランティアは、子供たちがこれまでの気づきを生かして活動ができるように、始まる前の目標設定や活動中、活動後に声かけを行っていました。





### 【クロージング】

活動の振り返りは、まず一人一人がキャンプで感じたことを個人やグループでまとめ、全員が円になって発表しました。子供たちからは、「友達が増えると楽しい」「言葉かけが大事」などの声が数多く聞かれました。最後には、保護者の前で代表の子供が感想を発表しました。ボランティアは、嬉しさとお別れの寂しさなどが入り混じった表情をしていました。

## ⑨ 評価

### ア. 子供たちのアンケート結果

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

### イ. 子供たちの声

- ・新しい友達ができると楽しいです。
- ・友達が困っている時に助けると仲良くなれました。
- ・野外炊事は周りの友達がいたからできました。

## 7) 企画したボランティアの声

### ① 企画

- ・事前に参加者について詳しく知ることは難しいが、対象年齢の子供の特性を知ることや子供の目線でプログラムを考えることが大切だということがわかりました。
- ・子供について大学で学んだ知識だけで終わるのではなく、実際に子供たちと関わることができ、企画をする前よりも子供への理解を深めることができたと思います。
- ・企画をする上で「何を」「いつまでに」「誰が」ということを決めなければ、準備がうまく進んで行かないということがわかりました。
- ・企画を進める中で自分とは異なる考え方や価値観に出会いました。多くの人との出会いは、自身の成長につながるので多くの人と出会いたいと感じました。
- ・企画を進める中で目的を確認しながら取り組むことの重要性を感じました。
- ・大人数で何か行う際は各自の動きを共有する時間を設けることで、今後の最適な行動選択をできると感じました。

### ② 運営

- ・子供への介入の度合いが多いという反省があり、子供が自分で考えて行動できるように介入の仕方や度合を考える必要性に気づけました。
- ・活動にメリハリがつくように子供を集めてから全体に話をするといったように自分の中に対応の仕方の引き出しを増やしたいと感じました。

## 8) 成果と課題

### ① 成果

異なる3大学の学生が、自分たちでスケジュールを立て、綿密な企画を練り、子供た

ちは誰もけがをすることなく、最後まで事業を運営することができました。また、子供たちからは、ねらいに沿った感想が聞かれました。

10名での企画は、役割分担を行うことができれば、負担を減らせる一方、意見のすり合わせや対面での会議を行うための日程調整に苦慮していました。その経験からボランティアは企画時に大切にすべきことに気づくことができました。ボランティアは、大学生、社会人で構成されており、次年度も挑戦したいと新たなキャンプの企画を始めています。

## ② 課題

今回のキャンプでは、実施2日前に大雪の予報が発表されました。雨のプログラムの準備はしていましたが、雪の中での事業は想定しておらず、当所職員が介入することになりました。ボランティアの予見力や判断力をつけてもらうためにも、荒天時のプログラムについての準備を促すことが必要でした。

ボランティアが、企画・運営力を身に着けるためには実践が必要です。ボランティア・コーディネーターが中心となって当所全体で支援をしていくことが重要だと考えます。

## ③ 今後の展望

学生においては、近年カリキュラムの増加などから自由な時間が減少している中、地域や子供たちのために自分の時間を活動に費やしています。熱い思いを持って多様な体験をする中で、知識や技術を身に付けていくボランティアについて、多くの方に知ってもらえるよう、SNS等の広報媒体を活用して「頑張る青少年」の姿を伝えていきたいです。

また、本事業を企画・運営する上で、ボランティア・コーディネーター以外にも気軽に相談ができるよう、プログラム体験会などでは、職員がボランティアと交流する機会を設けることで、ボランティアのサポートを当所全体で行ってきたいです。

## 7. 特別研修支援

### 諫早市少年センター 自然体験活動

令和3年 6月2日(水)～6月3日(木)  
9月16日(木)  
10月14日(木)～10月15日(金)  
11月16日(火)  
12月8日(水)  
令和4年 2月4日(金)

【担当：大嶋 和幸】



#### 1) 事業の背景

諫早市では、「不登校児童生徒対策事業」の一環として、平成6年8月から同市少年センター内に適応指導教室「ふれあい学級」を開設し、通級する不登校児童・生徒に対して個別の相談・指導を行い、小集団による体験活動等を通して、集団生活への適応を図るとともに、学校復帰への支援を行っています。

本所では、平成11年度から4年間、不登校児童・生徒の自立と集団生活への適応に向けた支援事業として、長崎県及び諫早市教育委員会の後援を受け、諫早市少年センターと連携し、不登校児童・生徒、保護者、教職員を対象に「ワキ・アイアイ教室」を開催しました。

前述の事業終了後も、諫早市少年センターは、不登校傾向にある児童・生徒の社会性や協調性、忍耐力などを育むために自然体験活動を重視し、学校復帰支援事業として、本所において年6回の自然体験活動を継続的に実施しています。

#### 2) 事業の趣旨

諫早市少年センターと連携して、人間関係を作る力、自己肯定感、忍耐力、自立心、感謝の気持ちなど学校生活に必要な力を身に付けさせるため、自然体験活動を核とした自立支援キャンプを実施する。

#### 3) 目標

- ① 人と人との関わり合いを通して、協調性・自主性を育む。
- ② 自然体験活動において困難なことを克服させることにより耐性を育む。
- ③ 自然体験活動を通じて「人・もの・こと」に対する感謝の気持ちを育む。

#### 4) 対象

諫早市少年センターに通う児童・生徒及び保護者

#### 5) 事業の実施

##### ① 期日及び主な活動

6月2日(水) ～3日(木)	[1日目] ウォークラリー、I-CAP、野外炊事(焼きそば)、 室内スポーツ(バドミントン) [2日目] 藍染め体験、野外炊事(パエリア)
9月16日(木)	沢登り

10月14日(木) ～15日(金)	[1日目] 自然のオブジェ制作、野外炊事(カレー)、 室内スポーツ(バドミントン) [2日目] 野外炊事(ピザ)
11月16日(火)	ディスクゴルフ、マウンテンバイク
12月8日(水)	野外炊事(パン、シチュー)
2月4日(金)	焼き板、イニシアティブゲーム

## ② 参加者

実施期日	児童・生徒	引率者・指導者・保護者
6月2日(水)～3日(木)	10	4
9月16日(木)	14	4
10月14日(木)～15日(金)	14	4
11月16日(火)	14	5
12月8日(水)	18	5
2月4日(金)	14	4

## ③ 活動の様子

### 6月2日(水)～3日(木)

入所式では、毎回、自分たちが作った「センター旗」を掲揚しています。今回の活動は、ウォークラリー、I-CAP(諫早コミュニケーションアドベンチャープログラム/専用コースを使用した人間関係づくりプログラム)、野外炊事(焼きそば、パエリア)、バドミントン、藍染め体験でした。昨年度も参加した子供たちを中心に、野外炊事や藍染め体験を手際よく進めていました。新型コロナウイルス感染症流行の影響で、運動する機会が少ない子供たちは、汗をかきながら、元気にウォークラリーやバドミントンを楽しみました。

### 9月16日(木)

今回の活動は沢登り、少年センターに通級する子供たちが楽しみにしているプログラムの一つでした。安全指導後、ヘルメット、ライフジャケットを装着して深海川コースに挑みました。沢の水の冷たさを感じながら、全員が協力して、岩を乗り越えていました。

### 10月14日(木)～15日(金)

今回の活動は、自然のオブジェ制作、野外炊事(カレー、ピザ)、バドミントンでした。自然のオブジェ制作は周辺の森で材料を集める計画でしたが、イノシシによる食害のため十分な量を確保できず、本所にある端材等も使いました。子供たちは、自然物と端材を上手に組み合わせて個性豊かな作品を作り上げました。

### 11月16日(火)

今回の活動は、ディスクゴルフとマウンテンバイクでした。どちらも慣れや技術が必要なプログラムで、初めはうまくいかず苦戦していましたが、練習を重ねることで上手にできるようになりました。子供たちはディスクがゴールに入った達成感やマウンテンバイクで散策路を走る爽快感から、明るい表情を見せていました。

## 12月8日(水)

今回の活動は野外炊事(パン、シチュー)でした。例年は餅つきを実施していましたが、新型コロナウイルス感染症感染防止の観点から、メニューを変更して実施しました。本所で何度も野外炊事をしてきた子供たちは、今までの経験を生かして、手際よくおいしいパンとシチューを作り上げました。

## 2月4日(金)

今回の活動は、思い出作品作りの焼き板と、最初の回でも実施した I-CAP(ジャイアントシーソー)でした。最初の回では、自分の考えを伝えることができずにいた子供たちも、1年間の活動を通して大きく成長し、仲間同士で意見を出し合いながら試行錯誤を繰り返し、全員の協力が必要な難しい課題をクリアすることができました。

### 【活動写真】

※写真は、参加者個人が特定できないよう加工しています。



## 6) 評価

### ① アンケート結果 (施設利用者アンケートから)

	有効である	やや有効である	やや有効ではない	有効ではない
活動プログラムはねらいに対して有効でしたか	100%	0%	0%	0%

### ② 子供たちの声

- ・パン・シチューづくりはみんなで協力して、おいしく作ることができました。毎回、ふだんできないような体験ができて、とても楽しく、いい思い出になりました。
- ・沢登りではみんなと協力でき、大変だったけど登り終えることができてうれしかったです。1年生のときよりも進んで行動できるようになったのでよかったです。
- ・体験活動に参加することで、センターの友達と仲を深めることができました。自分から話しかけることもできるようになったのでよかったです。
- ・特に楽しかったのはディスクゴルフです。自然を感じながら運動できるのが楽しいと思いました。
- ・自然の家ではスタッフの方にたくさん手助けをしてもらって、安全に楽しく活動ができたのでとても感謝しています。私も人の手助けができるようになりたいです。

## 7) 成果と課題

### ① 成果

少年センター職員の方からは、「学校では見せない素晴らしい笑顔や声を出して活動する姿を見ることができる。」「同じ活動をしていても毎回新しい発見がある。継続した取組で確かな成長を感じる。」「常に新しい子供が入ってくる中で、(自然の家の活動は)子供たちは新しい仲間の存在を感じつつ楽しい時間が過ごせ、距離を縮めることができる。」と、自然体験の効果を強く感じられていました。このことから、本所での支援により、少年センターが本所での活動において設定した目標を達成できているものと考えます。

### ② 課題

子供たちの中には、少年センターへの通級期間が長く、自然の家での活動に慣れていることから、自分ができることをやりたがる傾向が見られます。多様な経験が子供たちの成長につながることを考慮し、少年センターの職員の方と協力しながら、子供たちに新しい経験、新しい気づきを提供していく必要があります。

### ③ 今後の展望

これまで、諫早市少年センターとは本活動の他、不登校・引きこもり等の課題を抱える青少年の支援事業である『諫早自然の家に来てみんなね』『チョイス』において強い連携関係にあります。

今後も、不登校・引きこもりに悩む児童・生徒やその保護者に対して有効な支援を行えるようセンター職員との定期的な情報・意見交換を行い、連携を深めていきたいと思えます。

## 8. 出前事業

### 「出張！諫早自然の家!!」

～各学校等で自然の家のプログラムを体験しよう！～

令和3年9月1日（水）～3月31日（木）

【担当：大嶋 和幸】



#### (1) 事業の背景

独立行政法人国立青少年教育振興機構が令和元年度に実施した『青少年の体験活動等に関する意識調査』において「自然体験や生活体験、文化芸術体験が豊富な子供、お手伝いを多く行っている子供は、自己肯定感が高く、自立的行動習慣や探究力が身についている傾向がある」「社会経済的背景の相違に関わらず、自然体験が多い子供ほど、自己肯定感が高く、自立的行動習慣が身についている傾向がある」ことが報告されました。

一方、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、令和3年度は2月末現在、延べ323団体（約39,500人）の利用中止及び日程変更の連絡を受けました。

その主な要因は、「移動や宿泊による3密（密閉・密集・密接）回避対策が難しい」ということでした。連絡を受けた際、「集団宿泊活動は学級づくりや人間関係形成にとっても重要であるため実施したかった」「移動時の課題が解決できれば実施できた」という話もありました。

新型コロナウイルス感染症の影響により、体験活動の機会減少に拍車がかかり、学校等団体がその対応に苦しんでいる現在、本所は団体の元に赴き、体験活動を提供することが大切であると考え、「出張！諫早自然の家」を実施しました。

#### (2) 事業の趣旨

新型コロナウイルス感染症の全国的流行により、体験活動の機会を喪失した青少年に対して、体験活動の機会を提供するため、職員が赴き自然の家の活動プログラムを実施する。

#### (3) 対象

原則として自然の家の利用をキャンセル、断念した学校、団体等

#### (4) 事業の実施

##### 1) 活動内容

以下の出前講座を各場所で実施しました。

- ① イニシアティブゲーム【120～180分程度】仲間づくり、人間関係づくりの活動  
例：パイプライン、ズームリズーム、ラインナップなど
- ② 遊びリンピック【120分程度】競技性のある体験活動  
例：丸太積み、豆運び、輪投げ、ペットボトルダーツなど
- ③ クラフト活動【60～120分程度】自然の家で実施するクラフト活動  
例：丸太のコースター、ペンダント、プラホビー
- ④ 職員研修【120～180分程度】体験学習法や体験学習プログラムについての研修  
例：ゲームの体験と理論講座、教室でできるゲームの紹介
- ⑤ その他、団体と調整の上、本所が提供可能な活動  
例：防災教育



2) 期日 令和3年9月1日から3月31日までの団体希望日  
※実施日および詳細は、団体と自然の家にて調整

3) 参加費 原則無料  
※ただし、クラフトは材料費が必要

4) 依頼団体数及び活動内容 11団体

	小学校	高等学校	適応指導教室	PTA	健全育成会	合計
イニシアティブゲーム	5	1	1		1	8
職員研修				1		1
その他(防災プログラム)	1	1				2
合計	6	2	1	1	1	11

5) 参加者数 401名

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
小学生	0	107	87	0	0	78	0	272
中学・高校生	0	63	0	13	0		0	76
社会人	0	19	15	17	0	6	0	57
合計	0	189	102	30	0	84	0	405

6) 活動の様子



#### 【運営面での留意事項】

3密対策として、換気を徹底し、1m以内で対面しながら話し合う活動を避けました。また、他の参加者の体に触れなければならない活動はできる限り避け、実施する際には、休憩前最後の活動とし、活動後の手指消毒を徹底しました。



#### 【イニシアティブゲーム】

集団で活動する際に大切なことを考えられるように、班の全員で協力しなければ達成することが難しい活動を設定しました。参加者からは「価値観の違いを認め合うこと」「目標を決めて、チャレンジすること」などが大切という声が聞かれました。



#### 【職員研修】

人間関係作りやチーム作りに役立つ体験学習法や体験活動プログラムの理論を、実際に体験しながら学ぶ研修を実施しました。参加者は体験活動プログラムの効果を実感し、自身が所属する組織の運営に活用していきたいと話していました。



### 【その他の活動】

依頼団体と調整し、本所の事業で提供している防災プログラム（災害避難指示ゲーム、避難所体験）を実施しました。参加した児童・生徒は、災害時の情報の取扱いの難しさや避難所生活の不便さを体験し、その中から自助・共助の大切さを学び取っていました。

## （５）参加者の声

- ・新型コロナウイルス感染症拡大に伴い子供たちの活動が制限されている中で、子供たちに仲間づくりのきっかけを作ることができた。〔小学校指導者〕
- ・ふだん発言の少ない子供が積極的に話していることに驚き、一人一人の子供たちの見方が変わりました。〔小学校指導者〕
- ・本所が提供する体験活動プログラム（イニシアティブゲーム）を体験したことで、子供たちが短時間で大きく成長する姿を見ることができた。〔適応指導教室指導者〕
- ・この研修会で「体験活動プログラム」の効果を実感できた。次は市PTAや学校PTAで実施して、多くの保護者の方に「体験活動プログラム」の効果を伝えていきたい。〔PTA参加者〕
- ・災害避難ゲームや避難所体験を通して、周りの人と協力することの大切さを学びました。実際に災害に遭ったら、家族や仲間と協力できるようにしたい。〔高校生参加者〕

## （６）成果と課題

### １）成果

- ・13団体から依頼を受けた（うち2団体はキャンセル）ことから、利用者の要望に応えることができた事業でした。
- ・学校の先生方は、子供たちのふだんの様子と当日活動する様子の違いに驚き、子供たちの新たな一面を発見することができたようです。このことから、子供たちだけでなく先生方にとっても有意義な時間を提供できたと考えます。
- ・本事業を通して、子供たち、指導者ともに体験活動への期待が大きいこと、また、子供たちが主体的に変化していくことができる宿泊学習等の宿泊を伴う自然体験活動提供の重要性を改めて感じることができました。
- ・本事業は当初12月末までの事業として企画しましたが、団体の希望や新型コロナウイルス感染症の状況を考慮し、年度末まで期間を延長しました。また、実施する活動についても、団体の希望にできる限り寄り添うようにしました。それによって、参加団体と良好な関係を築くことができました。

### ２）課題

- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、学校では様々な行事が中止、短縮され、子供たち同士の間関係作りに支障をきたしている場合があります。そのような中、約2時間という活動時間では、子供たち同士の間関係や気づきを十分に深めていくことができる体験を提供できないことがありました。特に、イニシアティブゲームを提供する際は、事前に指導者との綿密な情報共有が必要だと感じました。

### 3) 今後の展望

- ・本事業は新型コロナウイルス感染症の流行に対応した事業として、今年度限りを想定して実施しました。次年度以降も、新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、利用団体に本所の体験活動プログラムを提供していきたいと思います。
- ・当機構においても、「地域に開かれた青少年教育施設の実現に向け、出前事業等を実施し、地域や関係機関・団体との連携を強化し体験活動の機会の充実を図ること」及び「地域のニーズを踏まえ連携先の拡大により体験活動の充実を図ること」を推進しています。今後も、共済事業や出前講座等を実施することにより、今年度事業に参加したPTA団体等、広いネットワークを持つ団体との連携を図り、本所のキャッチフレーズである『人づくり、仲間づくりの諫早』を体現できるよう、体験活動プログラムの普及、啓発に努めていきたいと思います。

## 9. 研修支援

### キャンプの日

毎月第3日曜日

【担当：和泉 志帆、田村 匠平】



#### (1) 事業の背景

国立諫早青少年自然の家（以下、当所）では、「キャンプをもっと身近なものにしたい」、「キャンプで家族団らんのひと時を過ごしてほしい」と考え、令和元年から毎月第3日曜日を当初の「キャンプの日」として制定し、家族の体験活動を推進しています。毎月第3日曜日と設定したのは、長崎県と佐賀県が「家庭の日」として家族団らんの機会を増やす運動を推進していることとねらいが合致しているからです。

「キャンプの日」では、道具を持っていない人や、やり方がわからない人など、キャンプ初心者や家族も職員の指導を受けながら、デイキャンプやテント泊体験をできます。

デイキャンプは、参加者に当所で活動できる自然体験を提供する特別プログラムを実施し、参加者が自分たちで体験活動を行うきっかけとなるような支援を行っています。

#### (2) 事業の趣旨

毎月第3日曜日を当所の「キャンプの日」として制定し、家族の体験活動を推進するとともに、キャンプを通して家族団らんの時間を提供する。

#### (3) 対象

幼児や小・中・高・大学生のいる家族

##### 1) デイキャンプ 定員 20 家族

※昨年度までは研修支援の一環として当日、来所で利用してもらっていましたが今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から定員を設け、事前申込み制としました。

##### 2) テント泊体験 定員 各回 6 家族程度

※WEB 申込みとし、多数の場合は初参加優先としました。

#### (4) 事業の実施

##### 1) 期日

令和3年4月～令和4年3月 毎月第3日曜日

※テント泊体験は、前日から実施（4、7、8、9、3月はデイキャンプのみ）

## 2) 参加者

外出自粛期間後に外遊びの需要が高まり、9月以降の参加者が増加しました。

開催月	デイキャンプ		テント泊体験	
	家族数	合計人数	家族数	合計人数
4月	12	69		
5月	中止（感染症拡大の影響による）			
6月	19	68	中止（感染症拡大の影響による）	
7月	14	49		
8月	中止（感染症拡大の影響による）			
9月	中止（感染症拡大の影響による）			
10月	18	61	6	27
11月	14	50	6	22
12月	6	16	3	11
1月	13	44	3	8
2月	感染症拡大の影響により、1家族限定	申込みなし	中止（感染症拡大の影響による）	
3月	6	23		
合計	102	380	18	68

## 3) プログラム

### ① デイキャンプ

10時から15時の間で実施しました。自由に体験できるプログラムとして「たき火、ハンモック、スラックライン等」を提供しました。また、希望者には、特別プログラムを提供し、空き缶でのお米炊き体験や沢歩き、森の散策などを行いました。

1月は、諫早市こどもの城の協力の下、諫早市こどもの城を会場にして実施しました。必要な道具を渡し、家族ごとにかまどづくり、火おこし体験を行いました。

<実施した特別プログラム>

4月	たき火づくり	6月	空き缶を使った炊飯	7月	沢登り
10月	自然散策	11月	端材や自然物のクラフト	12月	丸太のペンダント
3月	火おこし体験				

### ② テント泊体験

デイキャンプ前日から野外調理やテント泊を楽しめる機会としました。初心者の方でも参加しやすいように、スタッフによる活動時のサポートを手厚くしました。

土曜日		日曜日	
14:00	受付	7:00	朝食づくり
14:30	テント設営	9:00	片付け
16:00	夕食づくり	10:00	解散
20:00	たき火で団らん		

#### 4) 活動の様子



##### 【デイキャンプ】

新型コロナウイルス感染症対策を行った上で、他の家族と密にならないように配慮しながら実施しました。

テントやイスを持参してのんびり過ごしたり、持参した食べ物を焼いて食べたり、家族で団らんする姿が見られました。

家族ごとでの参加ですが、子供たち同士は、自然と距離が縮まりみんなで遊んでいる様子が見られました。また、保護者同士も会話が弾み、「他の家族と話せてよかった」との声も聞かれました。



##### 【特別プログラム】

7月には沢登りを行いました。小学校低学年の参加が多く、不安を感じている参加者もいましたが、出発前にスタッフが参加者同士の関係性を築き、お互いに声をかけあえる関係を作りました。初参加で経験が少ない家族も安心して活動できました。「もっと水遊びをしたかった」「楽しかった」などの声が聞かれました。



1月に諫早市こどもの城で行ったプログラムは、当所では実施していない家族ごとの居場所づくりでした。与えられた道具を使って、家族ごとに試行錯誤しながら、かまどづくりと火おこし体験をしました。運営の際、参加者が自分たちで外遊びを行うときに使える知識を持って帰ってもらえるよう意識しました。活動中、置いている丸太を積み上げるなど、周りの自然物を使って遊ぶ子供たちの姿が見られました。



##### 【テント泊体験】

泊まりたいテントを各家族が選び、他の家族と協力して設営しました。保護者同士の協力により、設営にかかる時間が減り、ゆっくりと楽しむ時間が増えました。

夕食作りは、事前に貸出道具、メニュー等の情報を提供することで、参加者の不安が少なくなるようにしました。困った時にはスタッフに聞きながら、自分達でキャンプを行えるよう試行錯誤する姿が見られました。

#### (5) 評価

##### 1) アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

###### ① デイキャンプ

満足	やや満足	やや不満	不満
94%	5%	1%	0%

## ② テント泊体験

満足	やや満足	やや不満	不満
89%	11%	0%	0%

## 2) 参加者の声

### ① デイキャンプ

- ・自分たちのペースで、たき火でいろいろ焼くことができ、楽しめました。
- ・雨の中でカートンドッグを作りました。それもまたいい体験でした。
- ・久しぶりに外で遊べて、一緒に遊んでくれて子供が喜んでいました。

### ② テント泊体験

- ・夫が不在の中、参加は少し不安でしたが、スタッフの方のサポートのおかげで楽しく過ごすことができました。
- ・イベント中止が多い中、感染防止対策をしながら外遊びの機会となり嬉しかった。

## (6) 成果と課題

### 1) 成果

コロナ禍が続く今年度は、感染防止対策として、デイキャンプの参加家族数を限定し、事前予約制とするなど安心して参加できるようになった結果、開催中止を回避し、不足する体験活動の場を提供できました。

また、新たな広報手段として、メールやLINEを活用したことにより、新規参加者の増加につながりました。参加者からは、他の参加者を見て、「私もこれをやってみたい」などの声が多く聞かれ、次の体験活動につながる場となりました。テント泊体験では、活動の様子をYouTubeで発信する家族や参加後に当所を利用し、活動を楽しむようになった家族もあり、自然体験活動を自分たちで楽しむきっかけを作ることができました。

事業運営においては、3年間の継続によりノウハウが定着し、全職員が運営スタッフとして活動の支援をできるようになりました。

### 2) 課題

新規参加者が増加する一方、デイキャンプ、テント泊体験ともにリピート率が高く、今後は、リピーターが自分たちで自然体験活動を行う次のステップに向かうための支援が必要です。

また、昨年度、参加者が多かった際の受付の混雑、活動場所の不足、安全管理の徹底といった課題と、今年度の事前予約制で定員有とした事業運営を比較し、改善を重ねることが必要です。そして、アフターコロナに向けて、キャンプを身近に感じる家族が増え、家族の体験活動を推進できる「キャンプの日」の新たな事業企画が求められます。

### 3) 今後の展望

「楽しい」「またやりたい」と思った家族に向けて、準備から片付けまで各自で行う内容の活動を企画し、スタッフの支援がなくても、自分たちでキャンプを行うことができるよう、レベルアップの機会を提供する取組を検討したいです。